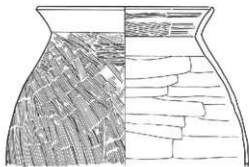




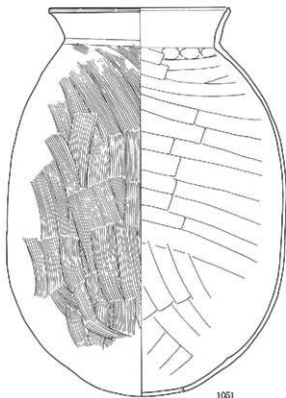
1052



1049



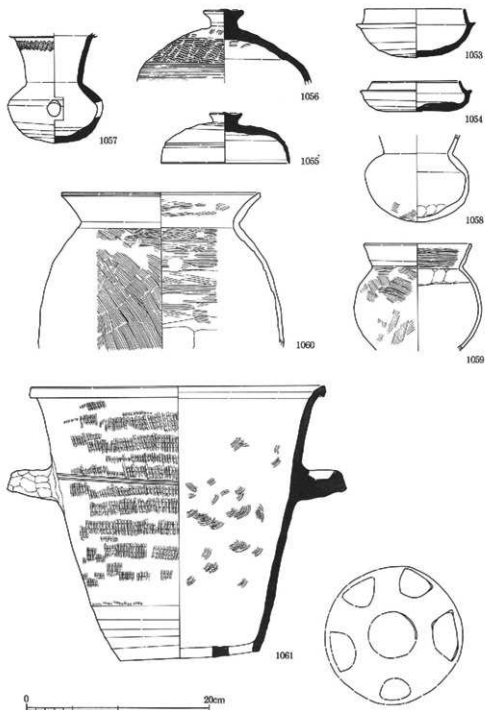
1050



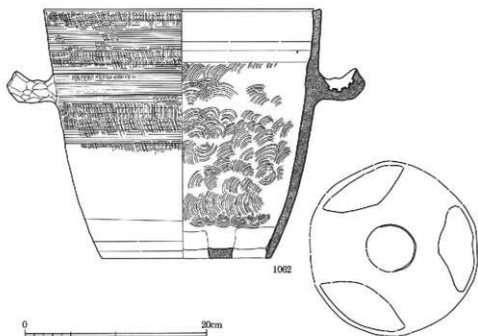
1051



第144圖 河川(56-O R) 岸部C群出土遺物 8



第145図 河川(56-O R)岸部上層出土遺物1



第146図 河川（56-O R）岸部上層出土遺物 2

d, 河川岸遺物群の上層（第145・146図，図版91）

河川岸遺物群を覆う堆積層（第112図参照）からの出土品である。河川岸の遺物群より時期の下るものもみられるが，河川岸遺物群と同時期のものも多くみられた。ここでは上層の遺物としたが，正確な層位に基づいた取り上げができなかった可能性が高く，ここに示した遺物中には，下層の遺物群A～Cに伴うものも含まれている。

須恵器（1053～1057・1061・1062）

1056・1057・1061・1062はA群，1055はB群，1053・1054はC群の上層で出土した。

このうち，1055・1053・1061・1062は下層の遺物群で同形態の出土がみられるものである。一方，1057の甕は下層の遺物群より後出する特徴を備えたものである。当堆積層の時期を直接反映した遺物と推定される。

土師器（1058～1060）

いずれもC群の上層から出土した。下層の遺物群の様相を反映していることがうかがえる。ただ，1058の壺は下層の土器群より先行する可能性が高い。

2. 河川堆積層出土遺物（第113・147～150図，図版91）

河川の堆積層における遺物の出土は，第113図に示した1～3の場所で比較的まとまって出土している。

以下，この各群や初期須恵器などを中心にしてその様相を概観する。

a. 遺物群1（第147図1063～1075）

河川岸から5～8m程東側へ寄った地点の上層付近から出土した遺物である。

出土須恵器のうち出土数の多い蓋杯を概観すると，6世紀前半から6世紀末までの3時期の混在が認められるが，中でも特に河川岸の遺物群よりも後出する時期のものが出土が顕著であった。

他の器種についても同様の傾向が看取される。

b. 遺物群2（第148図1076～1087）

河川岸から14～18m程東側に寄った地点で出土した遺物である。出土層は遺物群1よりは下層で，河川岸から約1～1.5mの深さである。

出土遺物のほとんどは須恵器で，河川岸の遺物群とほぼ同時期とされる。

c. 遺物群3（第148図1088～1093）

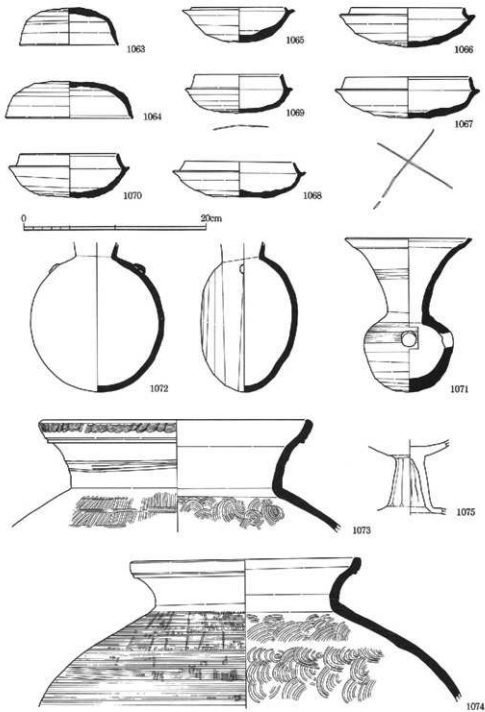
河川岸遺物C群の北側で出土した遺物である。散在した出土状況のため河川堆積の遺物に含めたが，出土位置や遺物の形態を考慮すると，河川岸部の遺物群として含めるべきかもしれない。

d. 河川出土の初期須恵器（第149図1094～1104，図版91）

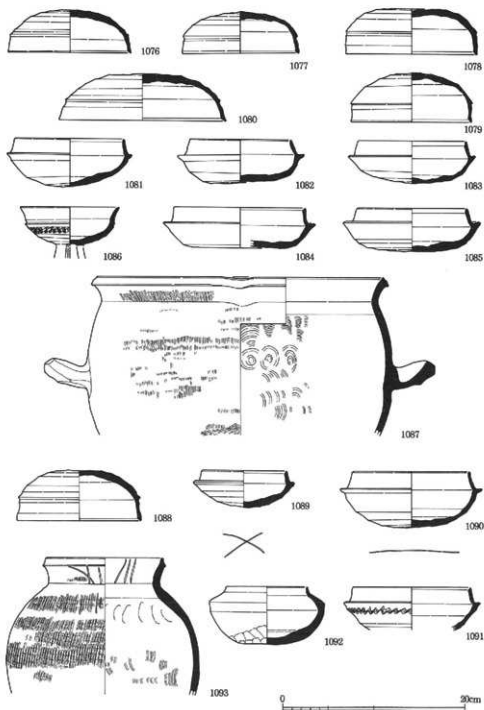
初期須恵器の出土は河川岸周辺に限られ，この出土分布は集落との位置関係が大きく影響していることがうかがえる。しかし，集落との位置関係から考えると出土数が少なく，多くは下流域に流されたものと推定された。

出土遺物は第149図に示した。

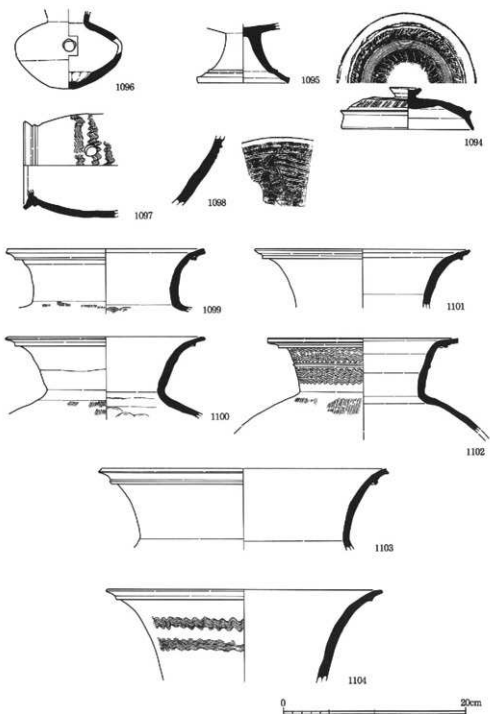
1094は天井部を刺突紋や沈線で飾る高杯の蓋である。TG232号に比べ天井部が偏平となるなど後出形態の特徴が看取される。他の高杯（1095）・甕（1096）などの小型製品も同様である。また，形態変化の遅い壺や甕の大型製品にも，後出する時期の特徴が看取さ



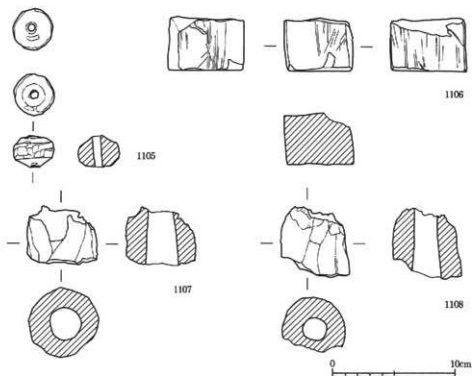
第147図 河川(56-OR)堆積層出土遺物1(遺物群1)



第148図 河川(56-OR)堆積層出土遺物2(遺物群2・3)



第149図 河川(56-O R)堆積層出土遺物3(初期須恵器)



第150図 河川 (56-O R) 堆積層出土遺物4 (紡錘車・フイゴ・石製品)

れるものがある。

河川の初期須恵器には1098の高杯形器台など最古型式まで遡る可能性のあるものも若干数あるが、その中心は最古型式より後出する時期にあることが認識されよう。

e. その他の遺物 (第150図1105~1108)

第150図には、土器以外の出土品を示した。

1105は陶製の紡錘車で、河川岸部A群に伴って出土した。直径3.4cm、最大厚2.5cmを測り、断面形は算盤玉形を呈する。紡錘車は谷部1の小開折谷 (393-O L) でも出しているが、谷例 (493) に比べると小型で全体の調整も粗雑である。本例は古墳時代後期のものと推定される。

1106は砥石である。欠損が著しい。

1107・1108は轆である。河川岸の遺物群3からの出土品であり、時期は古墳時代後期と考えられる。

第4節 小結

第Ⅹ調査区は調査面積は小規模であったが、多くの遺構・遺物が検出され良好な資料の蓄積をみた。このうち特に、古墳時代中期の集落と旧河川の成果には眼を見張るものがあり、ここで簡単にまとめておく。

第1項 古墳時代中期の集落

当調査区で検出された遺構は、溝、井戸、土墳墓と数は限られていた。しかし、これらの遺構と周辺域で検出されていた住居や溝との関係は明確にされ、居住域の様相がほぼ把握された。第97図を参考にして概観する。

まず、前調査でもその一部が検出されていたが、今回の調査により丘陵斜面部から河川に向かってのびることが確認された人工溝(601-OS)の存在が目される。この溝を境にしてその両側で遺構の分布状況は大きく異なっていた。溝の南側には竪穴住居などの居住に関係した遺構群の展開がみられたが、溝の北側では土墳墓が1基検出されたのみである。この溝は居住域を明確に区画するものであることが認識された。さらに、この溝は区画だけでなく、河川に注ぐことから、排水の役割も果たしていたこともうかがえた。その他この溝の西端には甕を数個正立させて並べていた。類似例を知らず明言できないが、祭祀的な様相もうかがえよう。

次に溝の南側に展開する居住域をみってみる。居住域の北限は溝601-OSの検出により確定されたが、南側はさらに広がる様相がうかがえた。周辺地形を概観するなら調査区の南側約80mの付近に河川に向かって開口する小規模な谷地形があり、最大でこの地点までの広がり予想されよう。

住居は調査区内で計7棟検出されている。住居115-ODは拡張住居で、120-ODとは近接した位置にある。両住居が並存したとは考え難く、検出された住居のうち3～4棟が同時並存していたと推定される。

住居構造も異なったものが存在する。住居1-ODは一辺5m前後の小規模な方形住居、120-ODは長辺8m、短辺4m前後の長方形大型住居である。前者は通常の竪穴住居とされるが、後者は住居の平面形や規模、住居周辺の落込みから粘土塊などが出土していることから専住以外の工房的な建物が推定されている。ただ、工房とするには状況証拠が少なく疑問視する意見も多い。

調査区内における住居の配置は、大型住居は通常の住居からやや離れた位置に立地する傾向がみられた。また、大型住居（120・1075-OD）の周辺には、同様の住居の痕跡と推定される小溝もあり、大型住居は集中することも推定された。ただ、これらが同時並存したとは考え難い。

さらに、住居の配置では大型住居の北側に位置する「L」状に巡る溝も注目される。溝の一边は区画溝に平行して走り、内側には掘立柱建物が復元される。住居の中で中心的な建物とされよう。

倉庫と考えられる建物は当調査区では検出されていない。古墳時代後期に属するものは3棟確認されているが、当調査区周辺における後期の遺構の様相からは、これらの建物が中期まで遡ることも充分考えられた。建物からの出土遺物が少なく明確にはされないが、3棟のうち重複関係や建物の立地から判断して「L」状に巡る溝の北側で検出された建物285-OBや大型建物付近の66-OBは中期まで遡る可能性は極めて高いとされよう。その他、居住域では井戸（42-OW）や土坑も検出されている。

このように居住域の様相からは「大庭寺ムラ」の計画的開発の一端をうかがい知ることが可能である。また居住域は旧河川の縁辺部に展開する。当時の交通や流通路を考えると河川が重要な役割を果たしたと考えられ、選地の大きな要因であったと推定されよう。

一方、当調査区周辺が居住域の中心地であることは確認されたが、「大庭寺ムラ」の集落構造を考える上では初期須恵器窯との関係も重要視される。

まず、丘陵2に構築された初期須恵器窯との時期的な関係である。

居住域から出土した初期須恵器は、土器溜り（1-OL）の時期まで下る製品はみられず、いずれも最古型式の範疇に含まれる。しかし、TG231・232号窯の製品と比べると形態差のある製品もあり、若干後出する特徴を備えた製品もみられた。

つまり、居住域の遺物には時期幅があり、その中心的な時期にTG231・232号の遺物が含まれていると考えられた。さらにこれらの様相からもTG231・232号窯の他にも初期須恵器窯が存在したことが確実視された。

次に初期須恵器窯との位置関係である。

遺物から概観すれば両窯と居住域はほぼ同時期とされ、この居住域は最古型式の須恵器生産集団によって営まれたことは確実視される。さらに、前述もしたがこの居住域には工房とも推定される建物もあり、単に居住域だけでなく須恵器製作に直接的に関連した機能も備えていたことも指摘されている。

須恵器生産の工房ではまず「粘土を捻って器を形作った工房」が想定される。しかし、当居住域と窯との直線距離は約270mあり、さらに、窯と居住域の間には谷部1が存在し大きな障害となっている。大型甕などの大型製品を居住域から窯まで運搬するには無理があり、たとえ運べたとしても合理的ではない。このような工房はやはり窯に近い場所に想定されよう。

居住域で検出された大型住居を「粘土を捻って器を形作った」工房とすることは否定され、現資料からは一般の住居とするほうが妥当であり、この区域は須恵器生産集落における「生活の場・居住域」と位置づけられよう。ただ、この大型住居は通有の住居とは異なったものであることは事実であり、住居構造の違いが何に起因するものかは今後の課題として残されている。

また、谷部1の小開折谷(393-O L)の縁辺の丘陵部には居住域と別単位の遺構群の存在が確実視されている。軟質系土器が数多く出土しており日常生活に関係した遺構群とも考えられるが、出土須恵器の様相からこの場所付近で二次的な選別が行われていた可能性も指摘される。積極的ではないが、この谷付近を選別を含めた工房的な作業エリアとして想定できるかもしれない

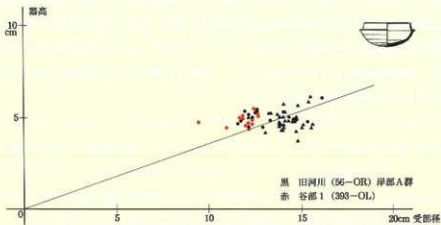
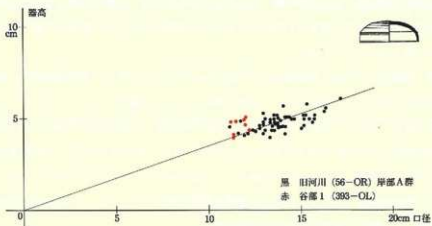
大庭寺遺跡の集落構造では生産の場である窯、生活の場である居住域が限定されたに留まらず、選別の場や河川(56-OR)を利用した流通や交通路まで想定された。そこには計画的な集落開発が読み取れ、さらに集落や窯経営の規模、後の発展性を考えると、この地「大庭寺」が須恵器生産の拠点として選ばれたのは、地理的条件とともに歴史的な背景も大きな要因であったことが予想される。つまり、「大庭寺ムラ」は西日本各地に分布する初期須恵器窯とは出現の契機は異なり、その成立にはより強い中央政権との関係が推定されよう。

第2項 旧河川(56-OR)

当該調査区での調査では、古墳時代中期の集落の把握の他、旧河川(56-OR)でも大きな成果が得られている。ここでは、旧河川から出土した岸部の遺物と河川の氾濫などの問題に触れておく。

1. 河川岸部の土器群

まず、河川岸部から多量に出土した遺物の所属時期が問題となる。



第151図 旧河川 (56-OR) 岸部と谷部1 (393-OL) 出土蓋杯の法量比較

河川岸部の出土状況を再度概観すると、出土位置により大きくA～C群に分けられた。このうちA群では須恵器が足の踏み場もないほど密集した状況で出土し、他群よりも特に一括性の高い遺物群として認識された。ここでは、このA群から出土した須恵器を基準に所属時期を検討する。

A群の出土須恵器の主な器種には、蓋杯、高杯、甕、壺があるが、このうち連続した形態変化が捉えやすく、時期決定の基準とされるものは蓋杯である。

A群蓋杯の特徴を概観する。

杯蓋 口径は11～17cmまでのものがあり、ぼらつきが認められる(第151図参照)。天井部は丸みをもつが、口径の大きいものはやや扁平化の傾向があり、天井部と口縁部との境

界を区画する稜は鋭いものとやや鈍くなったものがみられる。口縁部は直立気味のものと同開き気味のものがあり、前者は口径の小さいものに顕著にみられる。端部は内傾し面をなすものや段を有するものがある。

杯身 杯蓋にはば対応し受部径は11.6~16.9cmまでのものがある(第151図参照)。底体部の形状は小型品は丸みをもつが、口径の大型化したものは扁平となり、口径に対して器高も低くなる。立ち上がり部も小型と大型では差異があり、小型品は直立気味にのびるが、口径の大型化したものは内傾する傾向が強くなる。また、第151図にも示したが端部の形態も、小型では内傾し面をなすものが多いが、大型では丸くおさめるものが多くなる。

以上の蓋杯の形態の特徴をこれまでの須恵器編年で照らし合わせると、中村編年ではⅡ型式1段階、田辺編年ではMT15型式に比定されよう。

なお、口径の小さいものと、大型化したものでは、底体部や立ち上がり部など細部形態には差異が認められた。前者は当型式より先行する型式、後者は後出する型式で顕著となる特徴で、時間幅の存在が考えられる。しかし、出土状況、高杯など他器種の様相も考慮すれば、時間幅は存在するがその幅は小さく、須恵器の継起的な形態変化における同型式における新古の特徴の範疇で捉えられよう。

また、第151図には参考資料として、河川岸部A群の資料とともに谷部1(393-O-L)の第Ⅶ層上面と第Ⅶ層中から出土した蓋杯も併せて示した。蓋杯各個体ではA群の最も口径の小さい一群との識別は難しいが、全体を概観すれば口径の大型化したものがみられないことが看取される。A群よりさらに時間幅は小さく、時期はA群の古い段階からやや先行する中村編年のⅠ型式5段階・田辺編年のTK47型式に比定される。A群の多くはこれらの先行形態から継的に連続して生産されたことが認識され、集落遺跡でも明確な形態変化を捉えることが可能であった。さらに、これらの継起性のある一括性の高い遺物の発見により、大庭寺遺跡における集落の存続状況の一端も明らかとされた。

2. 旧河川の変遷

旧河川(56-OR)の調査は今回の調査だけでなく、1987年度にも大規模な調査が行われている。この調査では、河川の上層に奈良時代や鎌倉時代の遺構群が存在したため河川の調査は部分的なものに留まったが、河川内からは弥生時代から古墳時代までの多量の遺物が出土し注目された。得られた成果については、報告書の『陶邑・大庭寺遺跡』(1989年発行)と『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』(1990年発行)の中に掲載されているが、ここではこ

の成果も合わせて河川の変遷などについてまとめておく。

河川は平面的に流れの変遷を捉えることはできなかったが、土層断面や出土須恵器から判断して以下に記した5回程度の変遷のあったことが前報告では指摘されている。

第1期 I型式3段階までの初期須恵器を下限とする時期

第2期 I型式5段階を前後する時期

第3期 II型式1段階を前後する時期

第4期 II型式3段階を前後する時期

第5期 II型式4～5段階を前後する時期

1～3期は河川幅の最も広い時期である。時間幅が大きく河川の流れは変化していたものと推定されるが土層観察からは明確にできなかった。しかし、遺物の出土分布からはある程度の推定がなされる。

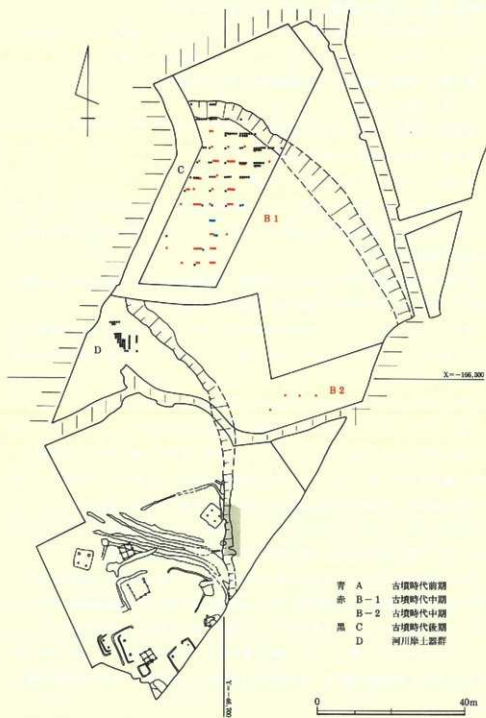
第153～156図には河川内から出土した遺物を、第152図にはこれら遺物群の出土位置を示した(図示したものはいずれも報告書に掲載された遺物を示した)。

調査地Bでは、時代によって遺物出土位置が若干異なることが看取される。古墳時代前期では遺物は少ないが河川のはば中央付近に集中し、中期になると遺物(初期須恵器や軟質系土器)は集中することはなく中央付近から東岸までのほぼ全域で出土ようになる。古墳時代中期では河川の中央付近に中心的な流れのあったことがうかがえよう。

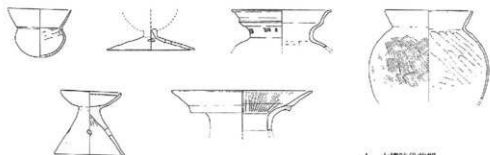
後期になると遺物は河川の東岸寄りと西岸に集中する傾向が認められる。いずれも2期～3期の時期であるが、前者は2期を中心とした時期、後者は3期を中心とした時期で、東岸の遺物群が若干先行する。また、西岸の遺物群は河川岸に投棄された土器群で、土器群の検出地点が3期の河川肩であったことが確実とされる。中央部に遺物が少ないこと、位置関係から同一の流れとは考えられないこと、遺物に若干の時期差がみられることなどから、2～3期では兩岸に沿って流れの中心があったことが推定されよう。

河川そのものが大きく縮小するのは4期以降である。3期と4期には時間的なギャップがあり、地層の観察からもこの間には約1m前後の無遺物のシルト層の堆積が判明している。4期の流れはこのシルト層を切り込んで流れ、河川の南側よりに規模を縮小していることがうかがえた。5期にはさらに規模を縮小させ、沖積化が進行する。河川は現在の石津川に近い位置に流れを変え、奈良時代には沖積化した場所に井戸を伴う建物群が営まれる。

以上、河川の変遷について記述したが、一方で河川内から出土した遺物も集落との関係



第152図 旧河川 (56-OR) における遺物の出土分布

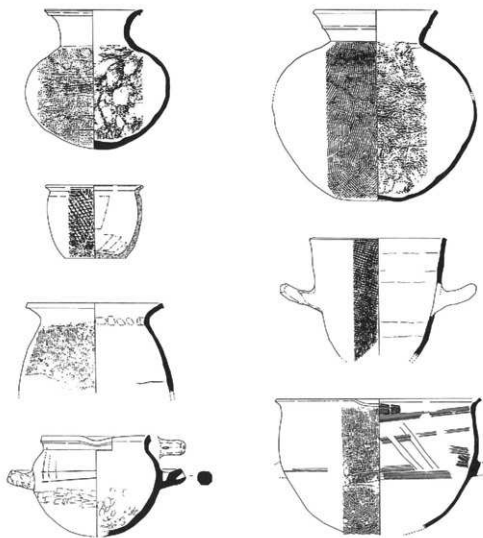


A 古墳時代前期

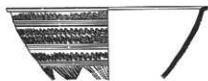


B-1 古墳時代中期

第153図 旧河川 (56-O R) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物 I

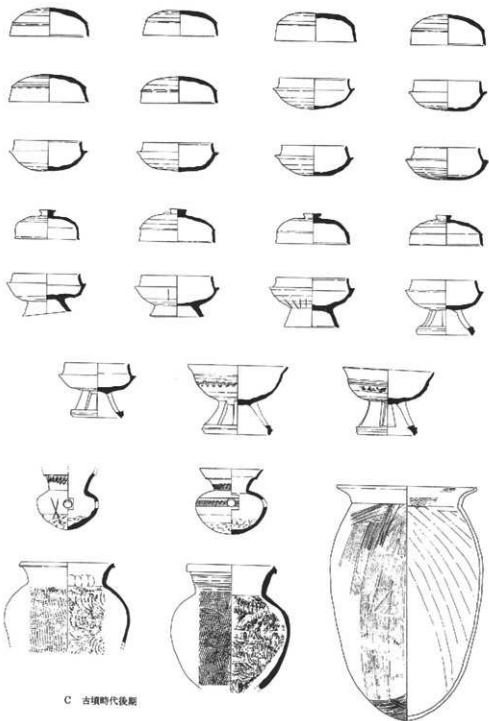


B-1 古墳時代中期



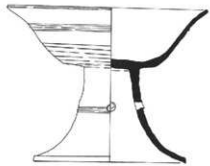
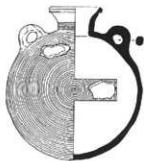
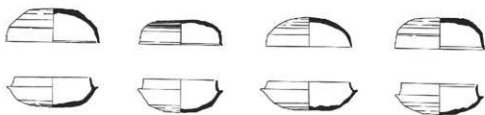
B-2 古墳時代中期

第154図 旧河川（56-O R）1987年度調査地B・C地区の出土遺物 2



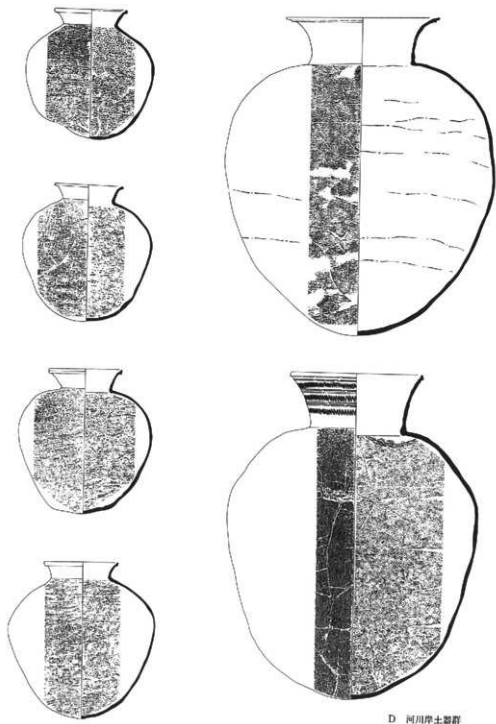
C 古墳時代後期

第155図 旧河川 (56-O R) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物3



D 河川岸土器群

第156図 旧河川(56-O R)1987年度調査地B・C地区の出土遺物4



第157図 旧河川 (56-O R) 1987年度調査地B・C地区の出土遺物 5

を知る上で重要なものがある。

1点は初期須恵器の問題である。大庭寺遺跡では、河川の他に窯（TG231・232号窯）、谷部1の小開析谷（393-OL）、居住域、谷部1土器溜り（1-OL土器溜り）からも多くの初期須恵器が出土している。これらの遺物群と河川資料のうち河川中央付近から出土したもの（第153図B-1）を比較すると、様相はいずれとも異なっていることが看取される。また、時期的には最古型式まで遡るものは少なく、蓋杯・樽形甕・すり鉢の存在や形態的な特徴からは谷部1の土器溜りの時期（TK73型式）と考えられた。現在のところ集落内の出土品に河川資料と重なる形態を備えたものは出土していない。

しかし、河川内出土遺物からは遺跡における集落展開を考えた場合、河川の縁辺に当該期の遺構群が展開したことが確実視される。出土位置などからは、現在検出されている居住域の南側に広がる中位段丘面あたりが有力視されよう。

また、窯・小開析谷（393-OL）、谷部1土器溜り、河川の出土遺物の様相からは、大庭寺遺跡における須恵器生産開始時からの連続した発展が読み取れ、さらに、須恵器が急速に列島化（陶邑化）した様子もうかがえよう。

次に後期を中心とした土器群D（第152・153図参照）の問題がある。土器群Dは1987年度の調査において河川西岸で検出した土器群である。土器群の特徴を列挙すれば、遺物は完形品が多い、大型甕や中型甕（壺）が多い、甕には直立するものがあるなどがあげられる。発掘当初、墓・須恵器の集積場あるいは選別場・祭祀・投棄などの性格が考えられたが、いずれも積極的に肯定する材料に欠け特定するまでに至っていない。

しかし、その後の調査により、土器群は河川内ではなく河川の岸肩部に形成され、当該調査区の河川岸部で検出された投棄された土器群とはその性格も異なることが推定された。土器が集中すること、直立する甕などが存在することも考え合わせると意図的な行為によるものと推定される。さらに、土器群と集落の位置関係では土器群が居住域（集落）から北側の少し離れた場所にあるが、居住域とは密接な関係にあることもうかがえる。

これらの状況から判断すれば、性格は特定できないが、土器群Dは単に土器の投棄場所とは考え難く、何等かの機能を備えた集落の一部であった可能性が高いとされよう。

第V章 第Ⅻ区の調査成果

第1節 調査概要（第158・159図、図版21）

第Ⅻ調査区は、丘陵1東側緩斜面の中位段丘面に設定された調査区で（第7図参照）、周辺域の調査では古墳時代から中世に至る時期の遺構が数多く検出されている。このうち古墳時代中期や奈良時代では建物配置が把握され、集落構造を考える上で良好な資料となっている。今回の調査でもこのような周辺の状況から、当該期の遺構の検出と共に、さらなる集落構造の解明が期待されていた。

調査地は長方形を呈する東地区と、細長くいびつな形をした西地区に分けられる。このうち東地区は現在宅地として利用されている。そのため削平が著しく、調査区西端の一部には近世の堆積層が薄く残存していたが、その他の場所では現代層の直下に段丘層が検出された。一方、西地区は耕地として利用され丘陵の地形を部分的に留めていた。しかし、後世の削平は著しく現代耕土の直下で段丘層が検出された。

遺構は東地区で、奈良時代の溝やピット、近世の土坑・井戸などが検出された。特に奈良時代の溝（1120-O S）は、位置関係からみて南側に展開する建物群との関係がうかがえ、その性格も注目された。

また、当調査区では古墳時代の遺構は検出されていない。これは削平による要因も推定されたが、これまでの調査成果を参考にすると、当調査区は居住域の外側にあたり当初から住居などの遺構は存在していなかったと考えられた。

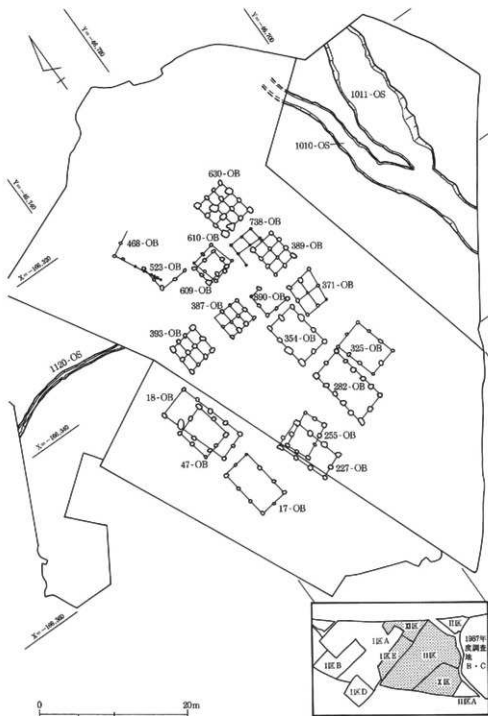
第2節 検出された遺構と遺物

1 溝1120-O S（第159～161図）

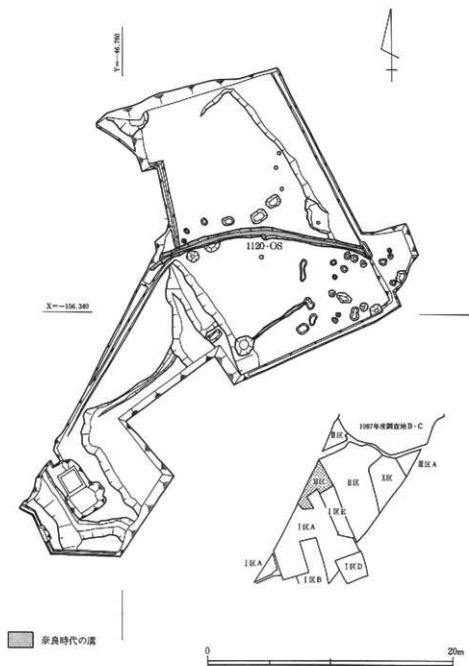
調査区のほぼ中央を東西方向に走る人工溝である。

西側は削平の為に調査区端で浅くなりその先は残存していなかったが、東側は調査区外の開析谷（谷部1）に向かってのびると推定された。溝の規模は現検出面で幅0.58～0.66 m、深さ0.32～0.42 mを測り、後世の削平を考慮すると、掘削当時はもう少し大きかったと推定された。

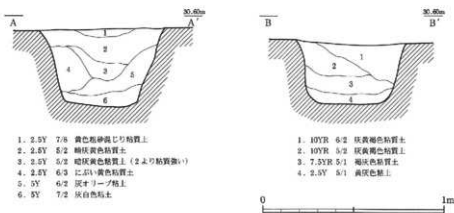
溝の断面形は底の広い「V」字形を呈し、埋土には褐色や灰色系の粘質土のレンズ状堆



第158図 第Ⅹ・Ⅺ調査区周辺の奈良時代遺構



第159図 第XI調査区遺構図



第160図 溝 (1120-OS) 断面図

積が認められた。底面はほぼ平坦で比高差が少なく、流れの方向は明確にできなかった。

出土遺物は第161図に示した。数は少ないが、溝の時期を反映した1111~1116は、溝の南側に広がる建物群周辺の遺構や包含層から出土した遺物とほぼ同時期である。建物群と溝がほぼ同時並存していたことがうかがえよう。

2 ビット群

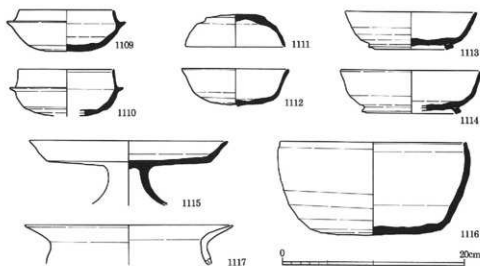
調査区の南西端付近で検出したビット群で、建物としてのまとまりは確認されなかった。なお、このビット群は溝 (1120-OS) の南側に位置するが、溝の北側では当該期の遺構は検出されていない。

その他、調査区のほぼ中央付近で土坑が数基、南端で素組りの井戸が検出されているが、これらはいずれも近世の遺構である。

第3節 小結

大庭寺遺跡では奈良時代の建物群が4~5群確認され (第111図参照)、中でも当調査区の南側に展開する建物群は、建物配置や出土遺物からみて他群を卓越した中心的な一群であることが推定されている。

今回の調査では新たにこの建物群を構成する建物は検出されず、これで、当建物群の配置や規模はほぼ限定されるに至った。また、本調査では建物群から開析谷にのびる「V」字形に掘削された立派な溝が検出され、建物群との関係も問題視された。ここでは、この溝について触れておく。



第161図 溝 (1120-O S) 出土遺物

発掘当初、溝の性格については、閉折谷からのびる耕作地経営に関係した導水路と考えられていた。しかし、第158図の配置図を概観すると、溝は建物群を避けることなく建物群の北西隅に向かってのびることが看取される。

耕作経営との関係は否定され、集落と直接的な関係がうかがえた。さらに、周辺域の削平状況からは、当溝は建物群の中心部を横断するとは考えられず、溝の西端は現在の検出位置とそれほど変わらないと推定された。

流れの方向が不明確で若干の疑問は残るが、このような状況から判断して、当溝は建物群の北西隅から派生する排水溝と考えておきたい。

第VI章 第Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区の調査成果

第1節 谷部2（2-O-L）の調査

第1項 概要（第7・162図、図版22～24・28～31）

全調査域の中の南西端に位置する第Ⅶ～Ⅸ調査区は、現在濃登ノ池として残存する開折谷が中心域である。この谷は石津川に向かって開折されるが、開口部から約110m入った地点で2本に枝別れる。当調査は、2本に枝別れた谷のうち西側に位置するものが対象である。本報告では便宜上、この開折谷を谷部2（2-O-L）と呼称した。

谷部2は、現在大規模な宅地造成や道路建設により旧地形は大きく改変されていたが、地形図（第3図）から、旧谷地形を復元することができた。

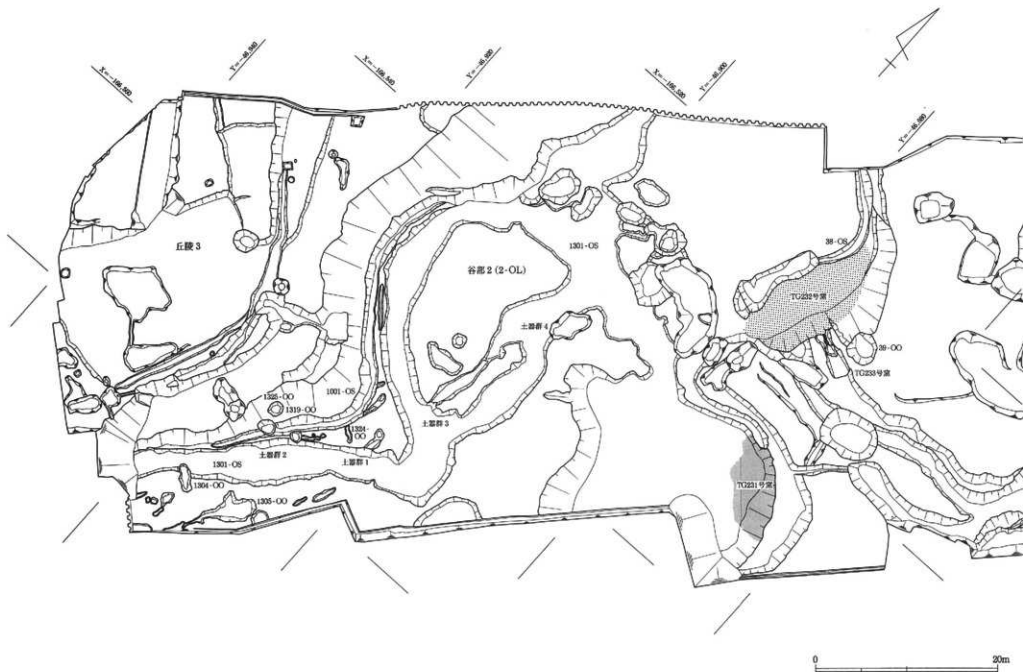
当谷は、松ノ池と呼称される溜池に向かってのびるが、さらにそこで枝別れた支谷が丘陵奥深くまで刻まれていることが地形図から読み取れた。調査地は開折谷の中では比較的開口部近い場所にあたるのがうかがえよう。また、大規模な開発以前にも当調査区付近は埋め立てられ、水田として大きく開発されていたこともこの地形図から知ることができた。

調査は、谷を東西方向に横断する形で行った。調査地点での幅は最も広い場所で53mを測る。丘陵と古墳時代の底面との比高差は、丘陵2側で1.5～2m、丘陵3側で2.5～3mを測るが、両丘陵とも後世に削平されており当時はさらに1mほど高かったと推定される。古墳時代における底面の標高は平均で約29.5mで、北側に向かって若干低くなるが、ほぼ平坦である。また、この古墳時代の底面の下層では、弥生時代の堆積層も確認されている。調査範囲の関係上全容は把握されなかったが、谷底を蛇行して走る自然の流路と考えられた。

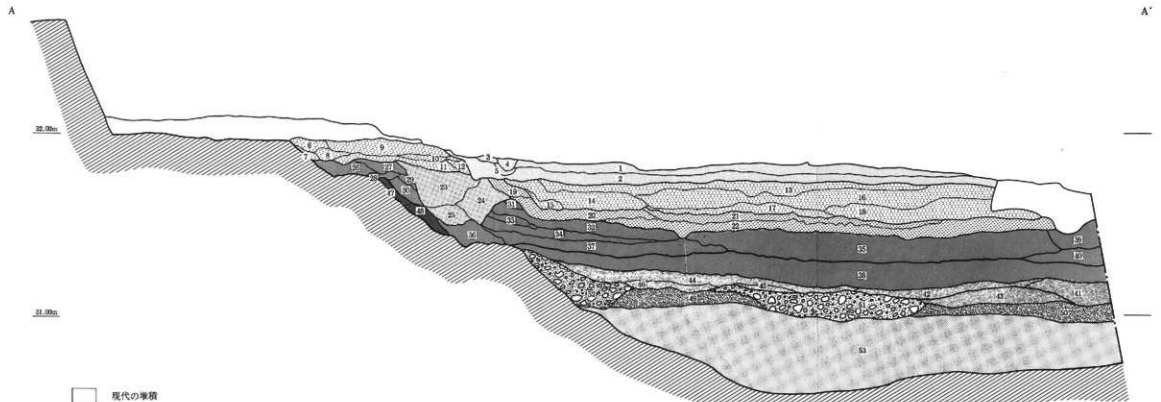
遺構は古墳時代における底面で古墳時代中期～末までのものが検出された。

中期では丘陵2側で最古型式の初期須恵器を伴う灰原を検出した。残念ながら竪穴本体は残存していなかったが、灰原は近接して2箇所あり2基の竪穴の存在が確実視された。北側に位置する灰原がTG232号竪穴、南側の灰原がTG231号竪穴と命名されている。

後期の遺構は、谷底を蛇行して走る自然流路、丘陵の下端部に沿って走る人工溝や土坑が検出された。特に人工溝の発見は、実際には検出されていないが、谷を利用した水田経



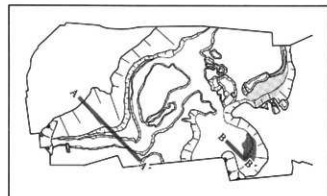
第162図 谷部 2 (2-0 L) 周辺の全体図 (第Ⅱ～Ⅲ調査区)



- 現代の堆積
- 第Ia層近世の堆積層（耕作土）
- 第Ib層近世の堆積層（整地土）
- 第II層近世の堆積層
- 第III層中世の堆積層
- 第IV層古墳時代後期～奈良時代の地層群
- 第V層古墳時代前期の堆積層
- 第VI層古墳時代前期の地層群
- 第VII層新石器時代の遺跡
- 古墳時代の溝・自然溝跡

- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色粘土（塊状土） | 27. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土混じり砂礫土 |
| 2. 2.5Y 4/8 オリーブ褐色粘土質土（若干砂粒混じり） | 28. 2.5Y 5/4 黄褐色砂礫土 |
| 3. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土（塊状土） | 29. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質土（若干砂粒混じる） |
| 4. 10Y 6/2 オリーブ灰色粘土土（塊状） | 30. 5Y 4/2 灰オリーブ色粘土質土（若干砂粒混じる） |
| 5. 10YR 4/6 褐色粘土土 | 31. 2.5Y 5/4 黄褐色粘土土 |
| 6. 2.5Y 5/4 オリーブ褐色粘じり粘土 | 32. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質土（若干砂粒混じる） |
| 7. 10YR 4/8 におい黄褐色粘土質土 | 33. 10YR 4/3 におい黄褐色砂礫混じり粘土質土（32より砂礫多い） |
| 8. 2.5Y 4/8 オリーブ褐色粘土質土 | 34. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘土質土（砂粒若干含む） |
| 9. 5Y 5/3 灰オリーブ砂礫土 | 35. 10YR 4/3 におい黄色粘土土（32より砂粒若干含む） |
| 10. 5Y 5/2 灰オリーブシルト | 36. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂礫混じり粘土土 |
| 11. 2.5Y 6/8 におい黄色無砂 | 37. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土質土（砂礫若干含む） |
| 12. 2.5Y 6/8 におい黄色砂礫混じり粘土質土 | 38. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土土（40より粘土質多い） |
| 13. 2.5Y 5/4 黄褐色砂礫混じり粘土質土 | 39. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘土土 |
| 14. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土質土（若干砂粒混じる） | 40. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土土（若干砂粒混じる） |
| 15. 10YR 5/4 におい黄褐色砂礫混じり粘土質土 | 41. 10YR 4/3 におい黄褐色シルト |
| 16. 10Y 6/2 オリーブ灰色砂礫土（粘土若干混じる） | 42. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土質土（44より砂粒多く含む） |
| 17. 2.5Y 6/4 におい黄色無砂 | 43. 2.5Y 5/3 黄褐色砂礫混じりシルト |
| 18. 2.5Y 5/6 黄褐色無砂 | 44. 2.5Y 3/2 黄褐色粘土砂礫混じる |
| 19. 2.5Y 5/3 黄褐色砂礫混じり粘土 | 45. 5Y 3/2 オリーブ無色粘土質土（44より砂粒多く含む） |
| 20. 2.5Y 4/8 オリーブ褐色粘土質シルト | 46. 2.5Y 3/2 黄褐色粘土土 |
| 21. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土土 | 47. 5Y 4/3 暗オリーブ色砂礫混じり粘土質土 |
| 22. 2.5Y 4/8 オリーブ褐色粘土土（若干砂粒混じる） | 48. 5Y 4/3 暗オリーブ色砂礫混じり粘土質土 |
| 23. 5Y 4/2 暗オリーブ色粘土混じり砂礫土 | 49. 10Y 5/2 オリーブ灰色砂礫土（堆山） |
| 24. 5Y 5/3 灰オリーブ色粘土混じり砂礫土 | 50. 5Y 4/2 灰オリーブ色粗砂 |
| 25. 5Y 5/3 灰オリーブ色砂礫混じり粘土土 | 51. 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂礫土 |
| 26. 10YR 4/4 褐色砂礫土（若干粘土質土混じる） | 52. 10YR 3/2 黄褐色砂礫混じり粘土質土（遺跡） |
| | 53. 弥生時代遺跡 |

天地 0 左右 0 2m
4m



第163図 谷部2（2-O-L）土層断面図1

営の可能性を示唆する遺構として注目されよう。また、丘陵3側の斜面では、土器を丘陵上から谷に投棄した状況がうかがえる場所も確認されている（第167図1154～1171）。

末業になると再び、丘陵2に竈（TG233号竈）が築造されるが、他の遺構は皆無で、堆積層からの遺物の出土も希薄となる。

古墳時代以降では明確な遺構は検出されていない。しかし、古墳時代から旧耕作面までの堆積地層の状況からは、近世には耕地化していたことがうかがえた。さらに、1990年度の調査では、谷を東西方向にせき止めた近世の堤も検出されている（図版22・23参照）。このことから近世には耕地開発のため大規模な谷の開発が行われたことがうかがえた。

当調査では、前述の谷部2の他、丘陵3にもその範囲が及んでいる。しかし、調査範囲が狭く、削平も著しく行われていたため、検出された遺構は近世以後の耕作に関連したもののみであった。

また、当調査区の南側は財団法人大阪文化財センターによって調査されている。谷部2では6世紀中から後葉と7世紀末から8世紀初頭の須恵器窯が2基検出され、丘陵3では奈良時代の建物群などの存在が確認されている。これらの遺構との関係も注目されよう。

第2項 地層の堆積状況（第163～169図、図版25）

谷部2は調査の関係上、谷を分断して調査区を設定したため、谷を横断する形での堆積状況の把握はできなかった。また、調査区が谷の屈曲部にあたり、場所によって堆積の状況が大きく異なっていた。ここでは、丘陵3から谷の中心部に近い地点を第163図に、丘陵2側の縁辺部の状況を第164図に示した。以下、両地点の堆積状況から、谷部2の堆積過程を概観する。

第I層：近世の堆積層である。谷中心部ではI a層とI b層に細分される。I a層は耕作土層で、I b層も砂礫層や粘質土によって構成され、耕作土に伴う整地地層の可能性が高い。丘陵2側も耕作土層と考えられた。

遺物は染付け椀（1119～1121）や皿（1118）などの近世遺物に加え、古墳時代の須恵器片などが出土している。

第II層：近世の堆積層である。いずれの地点でも細かい砂礫粒を含む褐色系粘質土がほぼ水平に堆積する。層厚は中央部は0.3mほどであるが、丘陵2側では0.8mと厚い。

遺物は染付け椀（1122・1123）などの近世遺物の他、瓦質土器（1126）、土師器（1124・

1125), 黒色土器 (1127), 須恵器 (1128~1132) などが出土している。

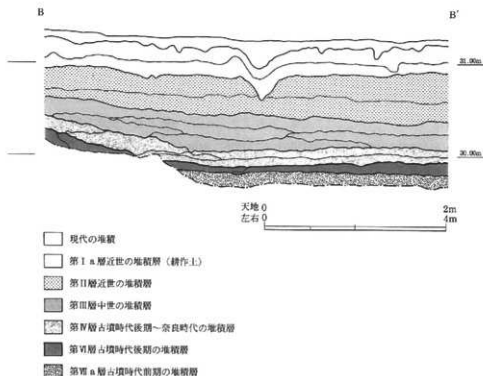
第三層: 谷底には層厚約1.2mで褐色系粘土が堆積し, 丘陵3側の斜面地には砂礫土や砂礫混じり粘質土が細かく堆積する。

出土遺物は図示していないが瓦器碗などの中世遺物の他, 古墳時代の須恵器 (1142), 奈良時代の須恵器 (1136・1137), 平安時代の黒色土器 (1134) や土師器 (1133) などがある。また, 調査区の南西側, 谷の中心部付近は, 丘陵2側に比べ奈良時代以降の遺物の出土量は極端に少なく, ほとんど出土しない状況であった。

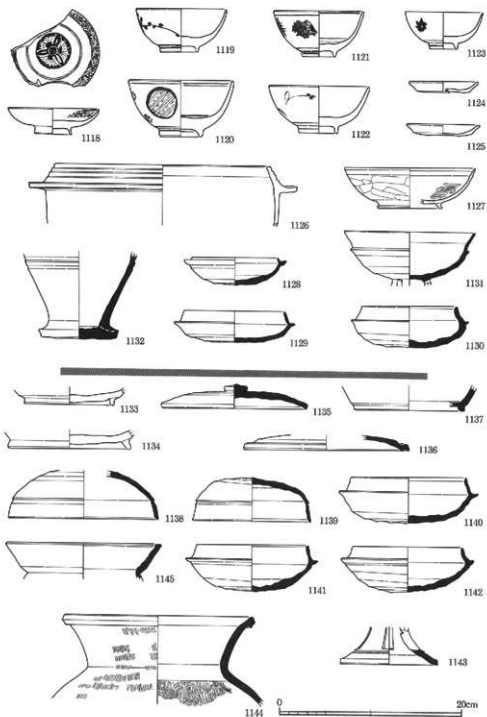
第四層: 丘陵2側のみで確認された黒褐色系の粘質土である。出土遺物 (1135・1138~1141・1143~1145) からみて古墳時代後期から奈良時代の堆積層と推定された。

また当層より初期須恵器の出土が顕著になるが, いずれも灰原付近からの出土である。なお, 初期須恵器は2点図示したが, このうち1145は器形など土師器の甕の特徴を備えたものであり, 須恵器と土師器の併行関係を考える上で重要な資料となっている。

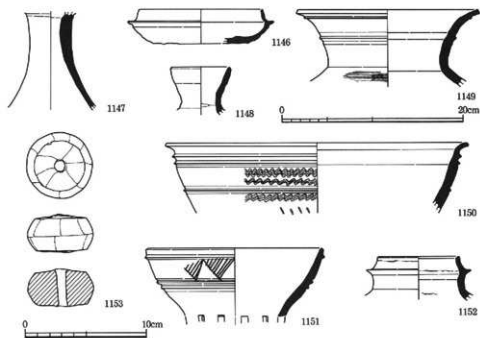
第五層: 黒褐色系の砂を含む粘質土で, 谷底に薄く堆積する。出土遺物 (1146~1153) や



第164図 谷部2 (2-OL) 土層断面図2



第165図 谷部2 (2-OL) 第I~IV層出土遺物



第166図 谷部2(2-O-L)第V層出土遺物

古墳時代後期の遺構との層位関係から、古墳時代後期から末頃にかけての堆積層と考えられる。初期須恵器の出土量は上層よりさらに増加する傾向がみられた。

第166図には代表的な初期須恵器も示した。1149・1150はT G231号窯、1151・1152はT G232号窯周辺からの出土品で、それぞれの窯の灰原から流失したものと推定された。なお、1151の筒形器台はT G232号窯の中でも未確認形態の新資料である。

第VI層：丘陵3側で確認された。古墳時代後期における丘陵斜面の堆積土層である。

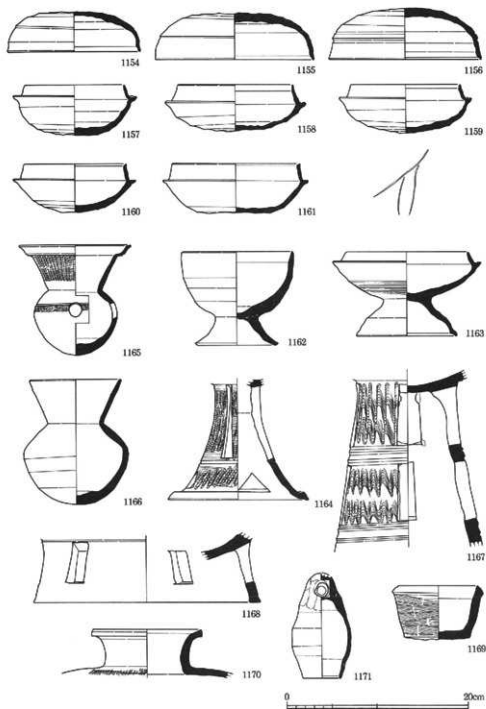
第167図、図版25に示した調査区の西端付近に投棄された遺物群(1154～1171)も、当層からの出土品である。

第VII層：下層で検出された自然流路の堆積層で、2層に大別される。

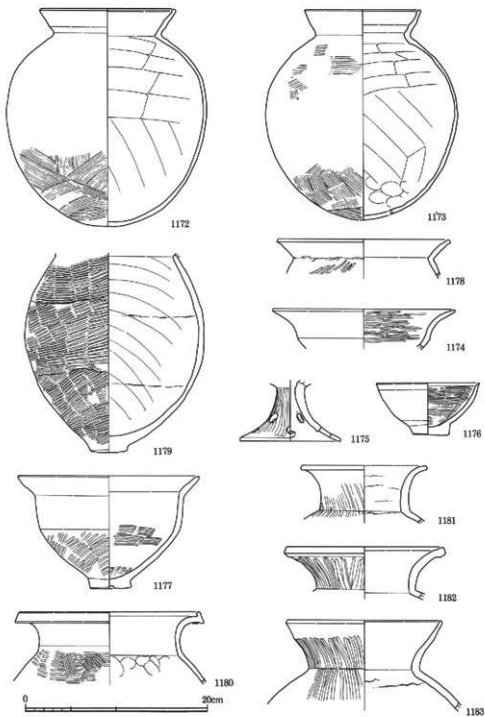
Ⅶa層は流路の大部分が埋没した後に調査区はほぼ全域を薄く覆う堆積層で、初期須恵器窯の灰原の下層で確認された旧表土層と対応する。中央付近は細かい砂混じりの礫であるが、丘陵2側では有機質を含んだ褐色系の粘質シルト層の堆積が認められた。

Ⅶb層は流路の堆積層で砂や礫による河川堆積の状況が看取される。

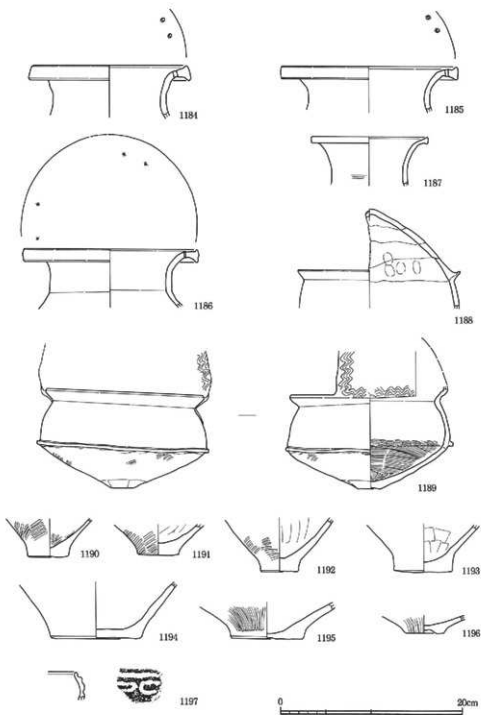
出土遺物は第168・169図に示した。このうち1172と1173がⅦa層、1178～1197がⅦb層からの出土遺物である。流路は弥生時代後期末には埋没し、その上を覆うⅦa層は古墳時



第167図 谷部2(2-O L)第VI層出土遺物



第168図 谷部2 (2-O-L) 第Ⅶ層出土遺物 1



第169図 谷部2 (2-O L) 第Ⅶ層出土遺物2

代前期にかけて形成されたことがうかがえよう。

以上の各層の様相から谷の堆積過程を概観すると、第Ⅳ層奈良時代までは自然の堆積であり、開析谷であったことがうかがえる。

谷部の堆積状況が一変するのは第Ⅲ層中世からである。堆積厚が増し、均一的な水平堆積も観察される。人為的な堆積の可能性が指摘され、谷部の開発が中世以降に活発化したことが推定されよう。さらに、近世になると堤を構築するなど、当調査区周辺は完全に耕地として開発され、現在の大規模開発以前と似た景観に至ったと考えられる。

第3項 検出された遺構（第162図）

前述したように谷部2（2-O-L）では、古墳時代中期～末の遺構が検出されている。このうち古墳時代中期の初期須恵器窯TG232号窯、古墳時代末の須恵器窯TG233号窯、丘陵2の下端部に沿って走る溝38-O-Sについては、すでに『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』で報告している。ここでの対象遺構は、新たに第Ⅱ～Ⅹ調査区で検出されたものである。

1. 古墳時代中期

丘陵2の斜面で初期須恵器窯TG231号窯に伴う灰原を検出した。当灰原は1991年度の調査でその一部が検出され、今回はその東側の追加調査である。調査前は窯本体の残存も期待されたが、完全に削平されており灰原の検出に留まった。しかし、灰原はその全体が検出され、ほぼ全容が把握された。なお、TG231号窯は出土遺物量も多く、別節（第Ⅵ章第2節）で詳説する。

2. 古墳時代後期

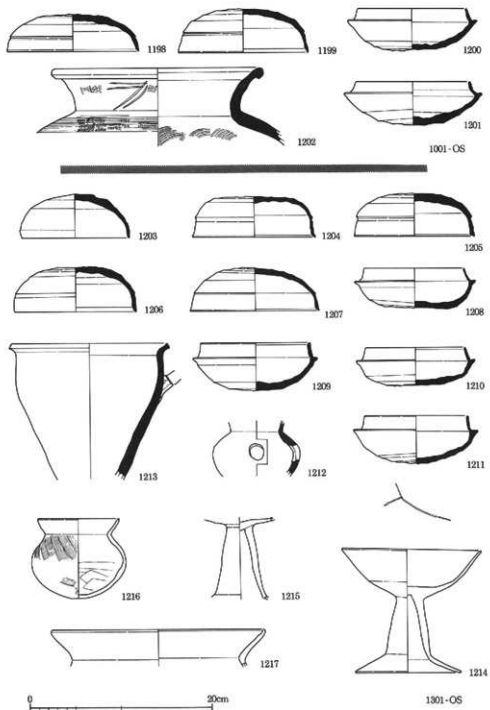
古墳時代後期の遺構には、溝、自然流路、土坑などがある。以下、各遺構を詳説する。

溝

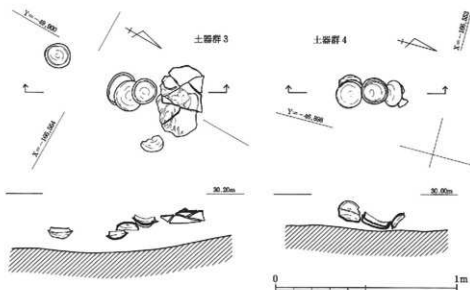
溝1001-O-S（第162・170図、図版24・26）

丘陵3の下端部に沿って走る人工的に掘削された溝である。規模は最も残存状況のよい地点で幅約0.5m、深さ約0.3mを測る。断面形は緩やかな「U」字形を呈し、砂礫土が堆積する。

出土遺物は第170図に示したが、蓋杯の形態から6世紀中頃から後半の年代が与えられ



第170回 溝 (1001-OS)・自然流路 (1301-OS) 出土遺物



第171図 自然流路(1301-O S)内土器群3・4出土状況図

よう。なお、当溝は平面的に、溝の北端や西端部が自然流路(1301-O S)と合流するように見えるが、自然流路よりは丘陵よりの高い位置に掘削されており、両端は削平されたものと推定される。

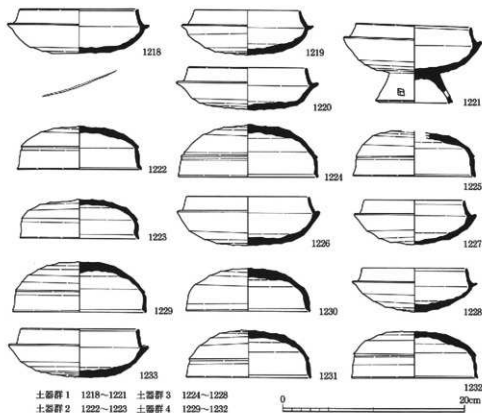
溝の性格については、谷を利用した耕地経営に関連したものである可能性は指摘できるが、水田などの生産遺構が検出されていないため断言はできない。

自然流路

自然流路1301-O S (第162・170～172図、図版26・27)

開口部に向かって、谷底を蛇行して走る。深さは平均0.4mと浅く、砂礫土が堆積する。堆積土内の出土遺物は第170図(1203～1217)に示したが、6世紀中頃から後半までのものがみられた。

また、この自然流路では須恵器の蓋杯などの完形品(1218～1232)が密集した地点が4箇所(第162図土器群1～4)確認されている。出土状況は図示したが、意図的に置かれた状況が看取されよう(第171図)。祭祀に関連したものと考えられるが、直接祭祀の行為を示すものか、祭祀後にまとめて廃棄したものかは明確にできない。遺物の時期は、いずれもほぼ6世紀中頃の年代が与えられるが、土器群1(1218～1221)には他より若干後出す特徴がうかがえる。



第172図 自然流路 (1301-O S) 内土器群 1~4

土坑

土坑1304-O O (第162・173図)

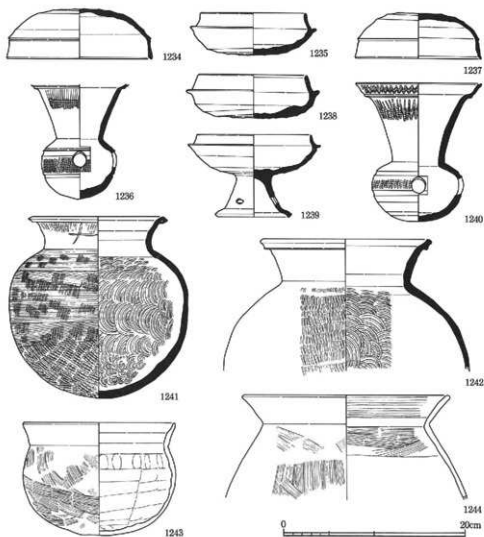
自然流路 (1301-O S) と重複する。流路の堆積土の一部を土坑として誤認した可能性が高い。遺物は流路と同時代の須恵器の蓋杯 (1234・1235) や甕 (1236) がある。

土坑1305-O O (第162・173図)

調査区の西端の谷底で検出された。平面形は不定形で自然の落込みの可能性が高い。遺物は6世紀の須恵器 (1241・1242) や土師器 (1243) が出土している。また、谷底には当土坑より浅い落込みも数多く点在する。谷の流路化に伴い形成されたものであろう。

土坑1319-O O (第162・173図)

丘陵3の下端部付近に位置する。平面形は円形を呈する。西側の一部は人工の溝 (1001-O S) と重複するが、断面観察により当土坑が後出することが確認された。出土遺物には須恵器の杯蓋 (1237) があるが、土坑の時期を直接反映した時期のものではない。



第173図 土坑 (1304・1305・1319・1324・1325-〇〇) 出土遺物

土坑1324-〇〇 (第162・173図)

丘陵3の下端部付近, 人工の溝 (1001-〇S) と自然流路 (1304-〇S) に挟まれて位置する。平面形は不定形で深さも浅い。自然の落込みの可能性が高い。遺物は図示した土師器の長胴甕 (1244) の他, 須恵器蓋杯などが出土している。

土坑1325-〇〇 (第162・173図)

丘陵3の下端部付近に位置する。不定形で浅く, 自然の落込みの可能性が高い。遺物は須恵器 (1238~1240) が出土している。

第2節 T G 231号窯の調査

第1項 概要（第174図、図版28～34）

T G 231号窯は1991年度の調査で灰原の一部が検出され、その存在が確実視された。

今回の調査はこの灰原の全容を把握するとともに、窯本体の一部が残存することを予想し、初期須恵器窯の構造が解明されるものと期待した。

調査は窯本体の残存状況を知るため丘陵部（丘陵2）から行った。現在丘陵は大規模に削平されているが、調査地付近は丘陵上に高くなっており、旧地形が残存していることを懸念していた。しかし、実際に調査を進めると、この高まりは現代の盛り土であり、調査地付近も大規模に削平されていたことが判明した。残念ながら、須恵器窯はその痕跡さえも検出されなかった。

一方、谷の斜面に広がる灰原はその全体が検出され、良好な成果が得られた。須恵器の時期についてはT G 232号窯同様最古型式に属することはすでに確認されていたが、今回の調査により器種構成や形態は若干異なった様相を示すことが明らかとなった。さらに、遺物の様相だけでなく、灰原の規模や須恵器の廃棄状況もT G 232号窯と大きく異なり、当窯との新旧関係などが問題となった。

以下、灰原で得られた成果を基にT G 231号窯を概観する。

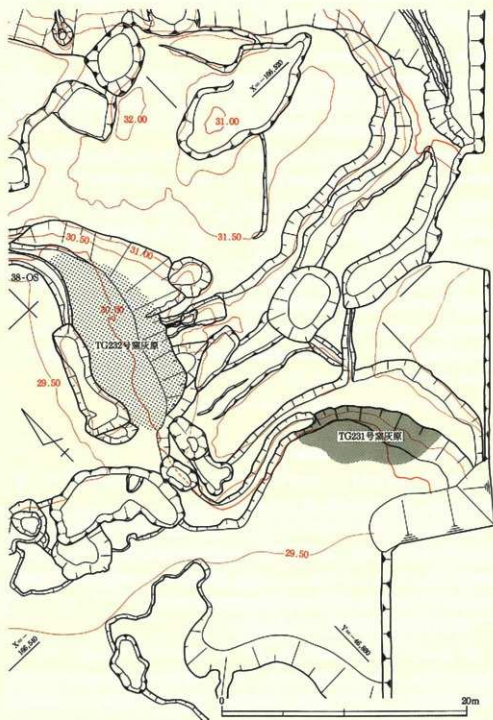
第2項 窯の立地（第174図、図版28～31）

丘陵が大きく削平されているため窯本体は残存していない。しかし、灰原の状況などから窯の立地についてはある程度の復元が可能である。

灰原は丘陵2の斜面地に形成されている。すぐ北側に位置するT G 232号窯の灰原とは最短で約9 mの距離にあり、当初は同一窯による灰原の可能性も考慮していた。しかし、両灰原は短く舌状に張り出す丘陵によって完全に分離され、遺物の様相にも若干の差異が認められることから、同一窯による灰原の可能性は否定された。

2基の窯が近接して築かれたことが推定された。

窯の方向については復元が困難である。まず、扇状に広がる灰原の中心点からそれぞれの窯を直行させた形での復元が仮定される。しかし、窯が築かれた丘陵は現存の状況で幅13.5～18 mと狭く、この形での復元には無理がある。むしろ、今回検出したT G 231号窯は扇状に広がる灰原の中心点からやや西方向に振った方向で復元され、2基の窯はほぼ並



第174図 T G 231・232号窟周辺の地形

列して構築されたと推定される。

窯の規模についても復元は難しい。TG232号窯では焼かれた大型甕の出土量からTK73号窯規模を下回ることはないと推定している。しかし、TG231号窯ではTG232号窯に比べると遺物数が少なく吹田32号窯例のような小型窯を想定することも可能である。また、同規模の大型窯が並存し、大型甕などの大型品をTG232号窯の灰原に廃棄したと考えることも可能である。いずれにしても窯の規模やその方向の問題については、窯本体が完全に削平されているため、復元は困難で推論の域をでない。

さらに、2基の窯が同時操業したか、時間差をもって操業したかの問題点も重要である。この問題については現在のところ、出土遺物の様相から判断して同時操業した時期が存在したと推定している。

第3項 灰原の状況（第174・175図、図版30～34）

前述したように灰原は1991年度の調査により東側の一部が検出されていたが、今回の調査によりその全体が把握された。

TG231・TG232号窯の灰原は丘陵2の西斜面に形成されるが、両灰原は短い舌状の張り出しにより完全に分離されている。灰原形成時（窯構築時）にこの張り出し周辺を開発した可能性も考えたが、この張り出しの斜面には弥生時代の遺物を包含する堆積層があり、旧地形を巧みに利用していることが明らかとなった。TG231号窯の灰原は、この張り出しの南側に形成された弧状のくぼ地に扇状に広がっていた。規模は最大長5m、下端幅10m、灰原の最大厚0.5mで、TG232号窯に比べ小規模な灰原であった。

灰原の堆積状況は当灰原が単独で存在したため良好な状態で観察された。第175図にはその状況を示した。

TG231号窯の灰原は3層に大別される。

灰原第Ⅲ層は、窯構築の開発に伴い丘陵から落された土砂堆積の可能性が高いものである。丘陵を構成する黄色粘土に灰が部分的に混じり、この面からの貫入も観察され、上2層とは完全に分離される。遺物は窯体片や須恵器片が若干出土している。

灰原第Ⅰ・Ⅱ層は黒色の灰が堆積する本来の灰原層である。

下層のⅡ層は堆積位置により第Ⅱa層とⅡb層に細別される。第Ⅱa層は灰原上端付近の堆積で、遺物の出土は少なく、生焼けの焼土塊が多く含まれていた。第Ⅱb層は灰原中央から裾部にかけて広がる堆積で、裾端に向かって徐々に薄くなる。遺物の出土も顕著で、

特に須恵器は当層の下部付近で多くみられた（図版34参照）。なお、当層の裾部付近は古墳時代後期の堆積層に覆われ若干の削平は受けていると推定された。

上層第Ⅰ層は灰原中央から丘陵寄りに堆積する。このうち上層でも下部の堆積である第7層は、窯壁片はみられるものの須恵器の出土は少ない傾向が看取された。

一方、第5層は多くの遺物が出土した。特に堆積層の上面に出土が集中する傾向がみられた。これは、第5層が現存の灰原層の最上層にあたり、灰層が後代に流失したために遺物だけが残りこのような出土状況になったためと推定された（図版33参照）。

また、上層では第1層南西端は小さな段が観察されるが、この段は部分的にえぐられたような形状を呈しており、古墳時代後期の堆積層（第3層）の様相から当期における谷の訂線と推定された。灰原上層や灰原層を覆う古墳時代後期の堆積層の様相からは、灰原層は後世に大きな削平を受けていないことがうかがえよう。

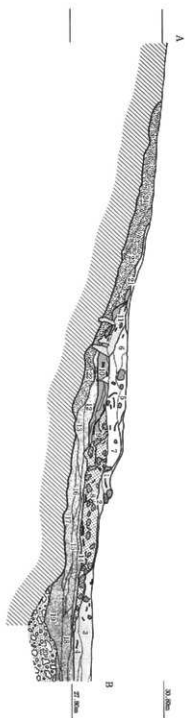
このように、灰原各層の様相には差異が認められた。大きくは、遺物層と灰層に分離することも可能である。窯の経営を考えた場合、数度の焼成やそれに伴う壁面や床面の修復が予想される。実際、灰原内から数多く窯壁片や焼土塊も出土しており、窯の修復が行われたことをうかがわせている。このような観点から、調査時点では各層はそれぞれの焼成時期に伴う堆積であり、各層の遺物には時間差が存在すると推定していた。

しかし、遺物整理の結果、各層間における遺物には接合関係のあるものが存在していた。積極的には焼成の時間差が反映したものとはいえないようである。

遺物は上記のように、最上層や第Ⅱb層で集中して出土した。しかし、TG232号窯と比べると出土量は比較にならないほど少ない。さらに、TG232号窯とはその出土状況も異なっていた（図版28・29参照）。TG232号窯は大型甕の口頸部など完形品に近い大型破片がまとまって出土するなど一般的な灰原とは異質の出土状況を呈していたが、TG231号窯ではこのような特徴はみられず大型品はそのほとんどが小破片となって出土した。

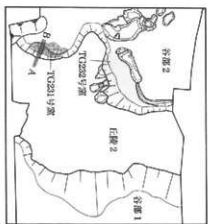
両窯は、近接して存在したにもかかわらず、遺物の出土状況や出土数、灰原規模にはあまりにも大きな差異が存在する。両窯で接合関係のある遺物も出土しており、TG232号窯の灰原はTG231号窯で焼成された大型品の廃棄も兼ねていたとする意見もある。ただ、現成果からこれらを明確することは無理である。

その他、当調査では灰原の下層で灰原形成時の旧表土層も確認されている。旧表土Ⅰ層は古墳時代前期、Ⅱ層は弥生時代堆積層である。特に旧表土第Ⅰ層からの出土土器は須恵器との併行関係を知る上で良好な資料となっている。



- 古墳時代末～奈良時代集積層
- 古墳時代後部集積層
- 灰層 I 層
- ▨ 灰層 IIa 層
- ▨ 灰層 IIb 層
- ▨ 灰層 III 層
- ▨ 灰層 IV 層
- ▨ 田表土層 I
- ▨ 田表土層 II
- ▨ 田表土層 III

- 1. 7.5V 2/1 黒色粘土
- 2. 10V 6/2 赤褐色土
- 3. 7.5V 3/1 黒色粘土
- 4. 5V 3/1 赤褐色土
- 5. 5V 2/2 赤褐色土
- 6. 5V 2/1 黒色粘土
- 7. 5V 2/1 黒色粘土
- 8. 2.5V 2/1 黒色粘土
- 9. 8V 2/1 黒色粘土
- 10. 7.5V 7/2 赤褐色土
- 11. 2.5V 2/1 黒色粘土
- 12. 7.5V 4/2 赤褐色土
- 13. 7.5V 5/2 赤褐色土
- 14. 2.5V 2/2 赤褐色土
- 15. 8.0V 4/1 赤褐色土
- 16. 5V 5/1 赤褐色土
- 17. 7.5V 5/1 赤褐色土
- 18. 7.5V 2/1 赤褐色土
- 19. 5V 4/2 赤褐色土
- 20. 7.5V 5/2 赤褐色土
- 21. 7.5V 5/1 赤褐色土
- 22. 7.5V 5/1 赤褐色土
- 23. 7.5V 7/1 赤褐色土
- 24. 2.5V 8/1 赤褐色土



第175図 T G 231号案の土層断面図

第4項 出土遺物 (第176～209図, 図版92～103)

1. 器種構成

前述もしたがTG231号の出土遺物はTG232号に比べ極端に少ない。しかし、両窯の遺物はいずれも最古型式に位置づけられるものであり、灰原の位置関係からみてもその関係が注目される。ここでは窯で焼成された須恵器の器種構成について両窯を比較する。

両窯で焼成された須恵器の器種を列挙する。

TG231号—把手付碗, 蓋, 高杯, 有蓋脚付鉢, 小型壺 (甕を含む), 器台, 壺, 器台, 大型甕。

TG232号—杯, 把手付碗, 鉢, 有蓋脚付小型壺, 蓋, 高杯, 小型壺 (甕を含む), 器台, 壺, 大型甕。

上記の器種構成を概観すると、両窯とも大まかには類似した器種構成であることはうかがえるが、小型器種では差異が認められた。

TG231号における杯・鉢・有蓋脚付小型壺, TG232号における有蓋脚付鉢の欠落である。このうちTG231号で欠落する杯・鉢・有蓋脚付小型壺は膨大な遺物量を誇るTG232号でも1～2点の出土であり、高杯や小型壺のように主に生産されたものではない。TG231号の灰原規模を考えた場合、当窯でも生産された可能性は充分考えられ、短絡的に欠落するとはいえない。一方、TG232号で欠落する有蓋脚付鉢は、TG232号の灰原規模などから判断すると当窯では生産されなかった可能性は高いとされる。単純な器種構成からでも若干の差異は看取されよう。

さらに、器種構成でも細かく観察すると、同器種における器形の異なった製品の存在が目される。

最も顕著な例は高杯で、TG232号で主として生産された多窓透かしの有蓋高杯がTG231号ではほとんど出土していない、TG231号にはTG232号でみられない無蓋高杯の存在などである。

ただ、高杯ではこのような差異はあるものの、他の多くの器種では両窯でほぼ共通した特徴が認められた。特に壺や大型甕は識別できないほど類似している。さらに、大型甕は両窯で最も積極的に生産された器種であることも確認された。

以上器種構成から両窯を概観すれば、器種構成の差異は小型製品の一部分に限られ、主となる製品は両窯ともほぼ類似したものを生産している。大局的にみると両窯には同一の生産の方向性がうかがえよう。

一方、部分的にみられる器種構成の差異が何に起因するのも重要な課題である。明言はできないが、これら各窯特有の器種あるいは器形ものは陶質土器の特徴を色濃く反映させた製品であることを考慮すれば、半島における製作工人の系譜の違いが影響しているとも考えられよう。

なお、TG231号では須恵器以外にも、軟質系土器、土師器、須恵器製作道具、窯道具などが出土している。このうち、軟質系土器の出土数は比較的多く、還元焰焼成によるものや焼き歪んだ製品もみられ、窖窯で焼成されたことが認識された。さらに、酸化焰により軟質に仕上がったものもある。窖窯を使用して軟質・硬質に焼き分ける焼成技術の存在も注目される。

以下、出土遺物を概観する。

2. 須恵器（第176～206図，図版92～102）

TG231号の出土遺物は、その特徴からは最古型式（TG232型式）の範疇に位置づけられることは明らかである。ここでは、近接するTG232号との諸関係も把握するため、両窯の比較を行いながら概観していく。

杯

TG231号では1点も出土していない。

把手付碗（1245～1248）

4点図示したが、口縁部まで残存した例は少ない。

1245は口径10.4cm、器高10cmを測り、把手付碗の中では大型のものである。口縁部が体部から内傾する特徴があるが、この形態はTG232号から出土していない。体部の装飾は沈線や凸帯を意識したと考えられる稜線が巡るのみである。また、底部付近のヘラケズリも粗く、TG232号で出土している陶質土器と類似する形態よりは全体的にも粗雑なつくりといえる。なお、焼成は不良で瓦質土器と似た焼成に仕上がる。

1246・1247は小型品である。1246は無紋であるが、器形の特徴はTG232号のA-2類と類似する。1247は底部の稜が鈍く丸みがあり、TG232号には類例がない。1248もやや大型であるが1247同様底部端には丸みをもち、仕上げのヘラケズリも粗い。TG232号の製品は底部は鋭く仕上げ、底部周辺のヘラケズリも細かく丁寧であった。TG231号の資料数が少なく比較の対象となり難いが、両窯における差異が指摘される。

有蓋脚付小型壺

T G 231号では出土していない。

蓋 (1249～1252)

4点図示した。いずれも陶質土器の影響を色濃く反映させた製品で、天井部は刺突紋で飾られる。

1249～1251は口径から高杯の蓋と考えられる。1249・1251はT G 232号のA類の範疇に含まれ、いずれも口縁部と天井部の境界に巡る凸帯は鋭い稜をもって張りだす。特に1249は凸帯の張りだしが大きく、施紋、調整も丁寧に行われる。1250は口縁部と天井部の境界に巡る凸帯の張りだしの小さいもので、前者に比べるとやや形態変化の進んだものと考えられる。焼き歪みが大きいため復元実測したが、口縁部はもう少し直立する可能性が高い。

1252は脚付付鉢に伴う蓋と推定される。口径は他の蓋に比べ大きく15.8cmを測る。器形も天井部が扁平、つまみの中心部を大きく隆起させるなど異なった特徴を有する。このような器形はT G 232号での出土はない。

高杯 (1253～1290)

有蓋高杯と無蓋高杯があるが、圧倒的に無蓋高杯の出土量が多い。また、完形品に復元されるものは数が限られ、多くは杯部や脚部の小破片となって出土している。ここでは有蓋高杯、無蓋高杯、脚部に分けて概観する。

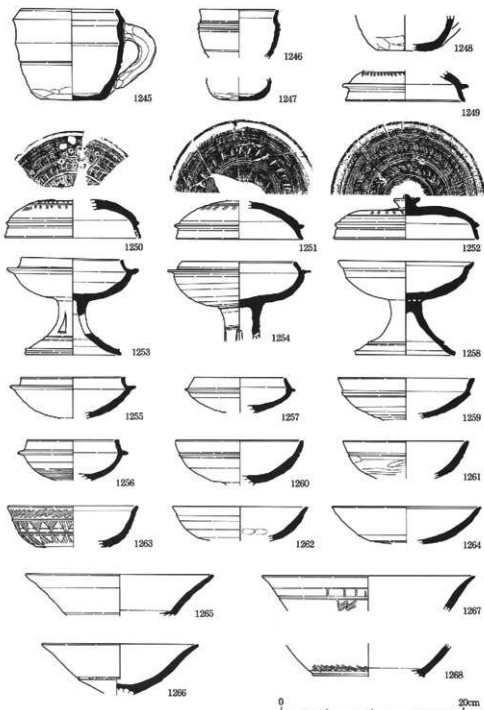
有蓋高杯 (1253～1257)

1253は体部の張りの小さい杯部に、三角形透かしを配する脚部が伴う形態である。杯形態はT G 232号の有蓋高杯F類と類似するが、T G 232号では三角透かしの脚部形態の出土は少なく、いずれも無蓋高杯に伴っている。

1254の杯部は体部にやや張りがあり、T G 232号の有蓋高杯C類と類似する。脚部も長方形透かしを4方に配するなどC類との共通性は認められるが、柱部が細い、凸帯を巡らせるなど全体の器形はむしろ無蓋高杯のB-4類と類似している。その他、1254には杯部と脚部の境界に小さな段をつくりだす特徴がある。この段や柱部の凸帯は陶質土器と共通する特徴で、陶質土器からの強い影響がうかがえよう。

1255～1257は杯部の小破片である。

1255はその特徴から上記の1253と類似する形態と推定される。1256・1257は口径が10cm前後の小型品である。1256は体部に張りがあり、外面にはカキ目が施される。1257は、受部が短い、口縁端を丸く仕上げるなどの特徴がある。



第176图 T G 231号窟出土须惠器 I (把手付碗·皿·高杯)

無蓋高杯 (1258~1268)

完形品に復元されたものは1258の1点のみである。1258は杯体部の上方を稜をもって屈曲させ、口縁部の内側には明確な面をつくりだす特徴をもち、TG232号での出土は確認されていない。なお、TG232号にも体部を屈曲させるものはあるが、いずれも有蓋高杯で形態も異なっている。脚部は柱部が他に比べやや太く安定感がある。また、裾の上部に巡る凸帯は、凸帯の下方を沈線状にくぼませることによって鋭い稜に仕上げている。

1259~1628は杯部片であるが、多くはTG232号の中に同形態のものが存在する。

1259~1260は無蓋高杯B類、1261・1264はA類、1263はJ類、1266はG類、1265・1267・1268はP類に該当する。このうち口縁部と体部の境界に凸帯を巡らすB類(1259~1260)はTG232号の中では最も出土数の多いものであり、TG231号でも同様の出土傾向がうかがえる。また、浅い碗状を呈するA類、底部に段を有し緩やかに外反する口縁部をもつG類、平たい底部から直線的に長くのびる口縁部をもつP類は土師器的な特徴を備えた形態として位置づけられるものである。TG232号における無蓋高杯の土師器的特徴を備えた製品と陶質土器的な製品との出土比率はほぼ1:1である。出土数が少なく断言はできないが、TG231号でもほぼ類似した傾向が看取されよう。なお、1266はTG232号でも同形態の出土例があり、ここでは須恵器として扱ったが、焼成や胎土などの特徴からは土師器とすべき製品である。

脚部 (1269~1290)

脚部片も代表的なものを図示した。多くはTG232号の中に同形態のものが存在している。1271は脚部B類、1269はC類、1273~1279・1286はE類、1283はF類に該当し、その他三角形透かしを配するもの(1270・1272)、裾に凸帯を巡らすものもTG232号からの出土が確認されている。

出土数は、柱部が細く大きく広がる裾上部に凸帯を巡らすE類が最も多く、TG232号と同様の出土傾向がみられた。

しかし、脚部でもTG232号窯とは異なった様相も看取される。TG232号では多窓透かしのA類や長方形透かしのC類がE類に次いで多くみられたのに対し、TG231号ではA・C類はほとんどみられなかった。さらに、TG232号ではA・C類はいずれも有蓋高杯に伴うが、TG231号の有蓋高杯には同形態のものは存在していない。つまり、脚部片の様相から判断すると、無蓋高杯は両窯で類似器形の焼成がうかがえるが、陶質土器の影響を色濃く反映させた有蓋高杯は両窯において主たる器形は異なっていたと推定された。

その他、TG231号では大型の脚部片も出土している。杯部の形態は不明であるが、1289は口縁部を大きく外反させるTG232号無蓋高杯H類などに伴うと推定される。1290は高杯の脚では最大級の大きさで、底径は21cmを測る。

大型蓋 (1291)

断面形は半球状を呈し、口縁部と天井部の境界には2条の凸帯が巡る。頂部は欠損するがつまみが付くと推定される。TG232号では出土していないが、谷部1(393-O L)に類似例がある。

なお、脚付鉢の可能性もあるが、残存片から復元すると脚部が細くなり、後出時期に類似する器形があることから、ここでは大型蓋として扱った。

脚付有蓋鉢 (1292・1293)

脚付有蓋鉢はTG232号での出土は確認されていない器種である。

当窯では完形品に復元されるものが2点(1292・1293)出土した。いずれも、鉢部は体部が内湾する、立ち上がりは内傾してのびる、受部の張り出しは鋭い、体部外面には数条の凸帯を巡らせるなど類似した特徴を有している。ただ、1293は1292に比べると扁平で、体部に巡る凸帯も2条と少ない。

脚部は1292と1293では脚高や形状に差異がある。1292は太い柱部から裾が大きく開くが、1293は柱部は短く、裾は若干外湾して開いている。脚裾端の形状も異なっている。しかし、透かしは柱部の長短の差があり段数は異なるが、いずれも涙滴形のものを採用しており共通点も認められる。TG231号では高杯に涙滴形の透かし孔の例はなく、この器種に限られたものである。

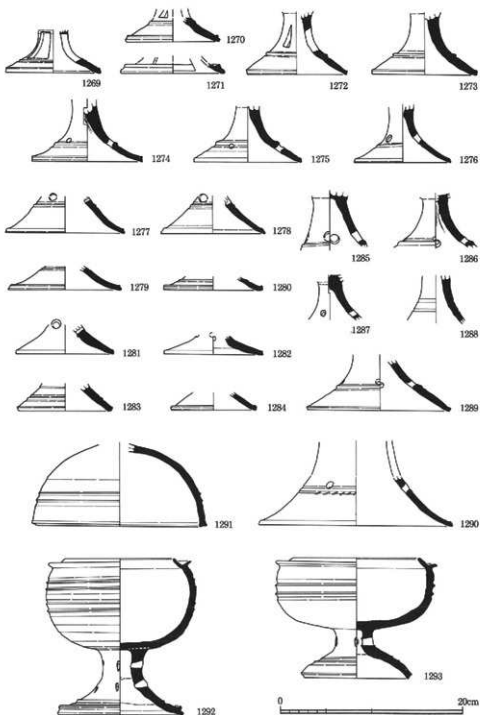
なお、この鉢に伴う蓋は1252のような口径が大きく天井部が扁平なものと推定される。

小型壺 (1294~1308)

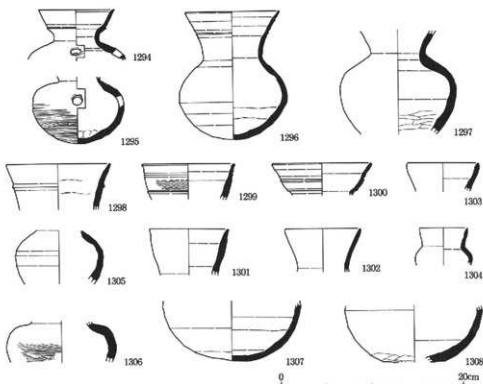
甕、広口壺、直口壺がある。

甕は出土数が少なく2点を図示した。1294は短い頸部から段を有し口縁部がのびるものである。TG232号の甕の中にも段を有するものが存在するが、1249ほど明確な段を有するものはない。底体部の器形については不明であるが、円孔は肩部の上方に位置する特徴がある。1295は底体部の残存品である。体部最大径は上半部に位置し、肩のやや張る形態である。口頸部は欠損するが1294と類似する形態に伴うと推定される。

広口壺も出土数が少なく、口縁部片を1点(1300)図示した。短い頸部から口縁部が大きく開く形態と推定される。TG232号にも出土例(小型壺B類)がある。



第177图 T G 231号窟出土须惠器2 (高杯·脚台付鉢)



第178図 T G 231号案出土須恵器 3 (小型壺)

直口壺は甕や広口壺に比べると出土数は多いが、全体の器形の把握されたものは2点のみであった。

1296は口径に対して口頸部が長いもので、頸部と口縁部の境界には凸帯を巡らせる。底体部は最大径が中央付近に位置し、肩の張りは小さい。T G 232号でも凸帯を巡らせる直口壺はみられるが、1296のような口径に対し口頸部の長いものは出土していない。1297は1296に比べるとやや肩の張る底体部であるが、口頸部は1296と類似した形態と推定される。

1298・1299・1301～1303はいずれも口頸部の小片である。1298は1296と類似する形態である。1299は口縁部を波状紋で飾り、T G 232号に同形態（口頸部D類かE類）がある。1301～1303は口頸部の短い直口壺でT G 232号（口頸部F類）でも数多く出土している。

1304はミニチュア的な小型壺である。口径は5.2cmを測る。

底体部は4点を図示した。

1305は穿孔の有無が確認されないが甕の可能性が高いものである。1306は他に比べ器壁

の厚いもので、T G 232号にも同形態があるが全体器形は不明である。1307・1308は小型壺の中では大型で、T G 232号の出土例から、直口壺（小型壺C類）と推定される。

T G 231号の小型壺の様相はT G 232号とほぼ類似した傾向が看取される。しかし、凸帯を巡らせる直口壺の中に口径に対し口頸部の長いものが存在するなど、他器種ほど顕著ではないが差異も認められた。

器台（1309～1315）

T G 231号から出土した器台はいずれも高杯形器台であり、筒形器台の出土は確認されなかった。

1309は杯体部に膨らみをもつ形態で、T G 232号の高杯形器台A類と類似する。しかし、T G 232号で最も深い杯部のA-1類と比較すると、A-1類よりも口径に対して杯部が深い、断面形は膨らみの大きい体部下半から上半部が直立気味にのびるなどの差異が認められる。また、紋様構成でも2段に描かれた鋸歯紋は下向きである、鋸歯紋は沈線によって区画されるなどT G 232号とは異なった特徴が看取される。このような特徴から1309は全体的な器形ではT G 232号のA類の範疇に含まれるが、細部はA-1～3類いずれとも異なりT G 232号の中では確認されていない形態と認識することも可能である。脚部は残存していないが、杯部径と接合部径の関係や接合部の角度から判断して柱部から裾に向かって徐々に開く形態と推定される。

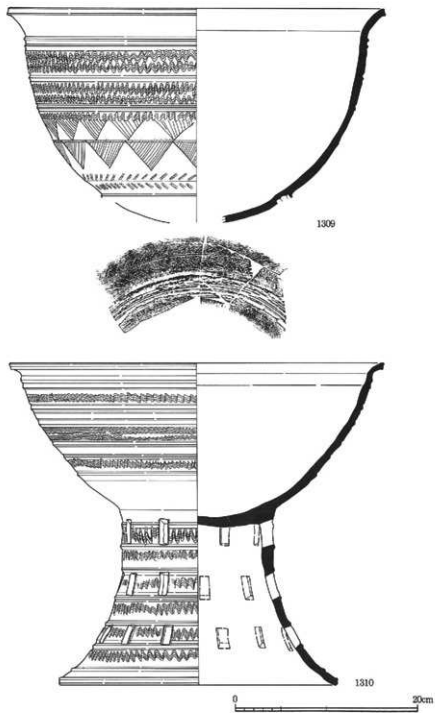
1310の杯部も断面形はT G 232号A-2類と類似するが、紋様帯など細部はA類と異なる。脚部も同様で全体の形状はT G 232号と類似するが、紋様帯は細かく区画される、透かしは1段おきに配されるなど細部は大きく異なっている。また、調整や凸帯の引出しなど全体のつくりも粗く、T G 232号のA類とは別形態と認識される。

1311～1314は杯部の破片である。

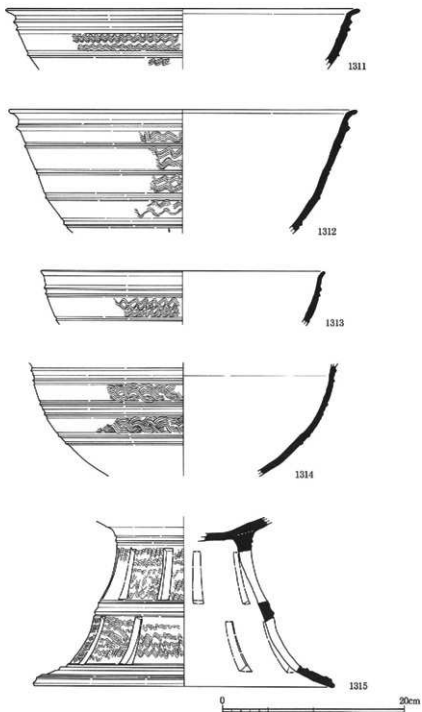
このうち1312は直線的な体部のT G 232号のB類と類似するが、1311・1313については小破片のためT G 232号との比較はできない。なお、体部が組紐紋で飾られる1314はT G 232号との接合資料である。

脚部片は図化されたものが少ない。図化された1315は幅広い紋様帯が特徴で、T G 232号にも出土例がある。

このように、器台ではT G 232号と比較すると全体の器形・採用された紋様など全体様相は類似することがうかがえる。しかし、細かい部分まで比較すると形態差が認められるものの存在がうかがえる。



第179图 T G 231号窯出土須恵器 4 (器台)



第180图 T G 231号窟出土须惠器 5 (器台)

壺 (1316~1370)

甕と区別し難いものもあり、TG232号同様口径30cm以下のものを壺として扱った。

1316~1318は頸部を波状紋で飾る広口壺である。同形態はTG232号でも出土しているが、その数は少ない。

1319・1320はいずれも長い口頸部をもち、頸部には数条の凸帯を巡らせるが、口頸部の形状は異なる。1319は直立する頸部から口縁部が緩やかに外反する形態で、TG232号では確認されていない。また、頸部の凸帯も類例の少ない形態で2条1単位を2段に巡らしている。1320は口頸部がラッパ状に大きく開き、TG232号にもみられるものである。

1321は底体部に巡る螺旋状沈線が特徴である。ただ、この沈線はタケ目との組み合わせが一般的であるが、1321ではカキ目と組み合わせられている。

1322~1340は頸部のはぼ中央に巡る凸帯が特徴である。出土数が多く壺の中では主製品として生産されたことがうかがえる。また、当形態はTG232号でも多く出土し、口頸部の形状により細分されている。TG232号の分類では、1322~1331は直立気味の頸部から口縁部が大きく開く壺D-1・2類に該当し、頸部中央に凸帯を巡らすものの中では最も出土の多いものである。1332~1337は前者に比べ口径に対し口頸部の短いE類、1338・1339は直線的に開いてのびるF類、1340は口縁部の開きが小さくD-3類に該当する。

1341は口縁部が蓋受け状を呈するもので、TG232号での出土は確認されていない。

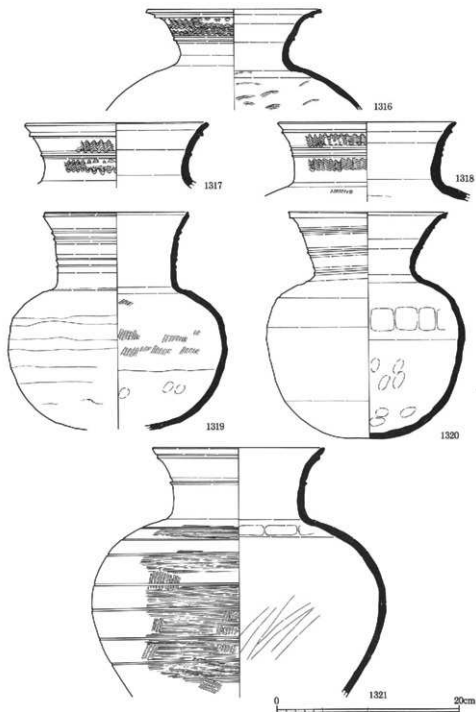
1342は底体部の肩部に付けられた環状の耳が特徴である。口頸部は直線的に開く短い頸部に2条の凸帯が巡り、底体部の上端付近には浅い沈線がある。ただ、小破片のため底体部全体に螺旋状に巡るものかは不明である。なお、肩部に耳や突起の付くものはTG232号の大型甕に2点あるのみである。

1343・1344はいわゆる二重口縁形態の壺である。1345も二重口縁を意識した可能性が高いもので、口縁部は直立し、頸部の境界には凸帯が巡る。

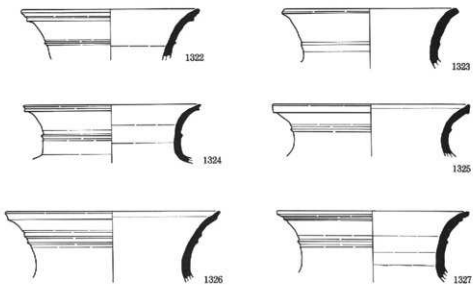
1346は直立する頸部の短頸壺である。TG232号のO類と似るが、口頸部は短く、器壁も厚い。

1347はD類の範疇に含まれるとも考えられるが、全体には粗雑なつくりの製品で前述のD類(1322~1331)とは若干異なっている。

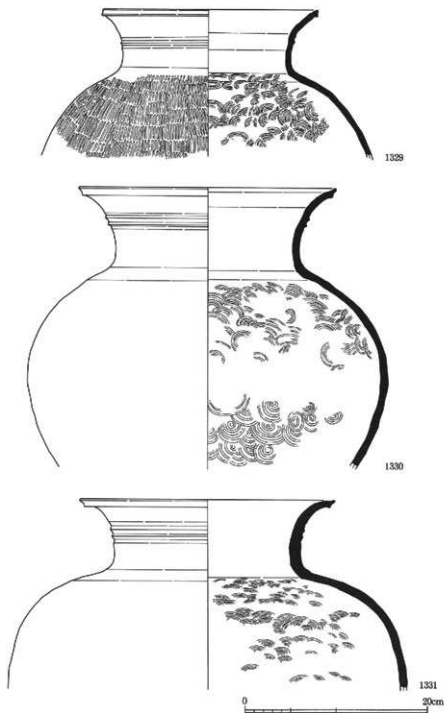
1348~1353は口縁端部の下方に凸帯を巡らすシンプルなもので、大型甕の口頸部と共通する。直立気味の頸部から口縁部が大きく外反するもの(TG232号I類)とラッパ状に開く(TG232号J類)ものがある。



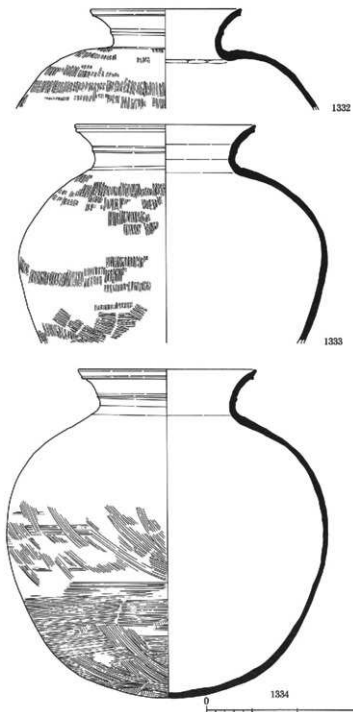
第181图 T G 231号案出土须惠器 6 (壶)



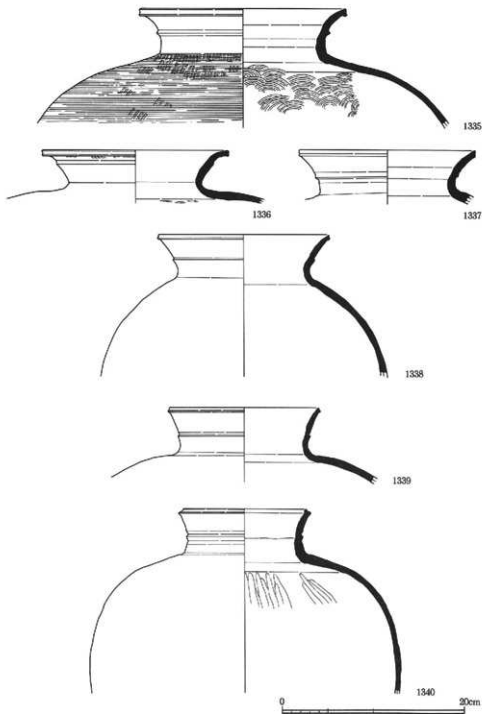
第182图 T G 231号窟出土须惠器 7 (壹)



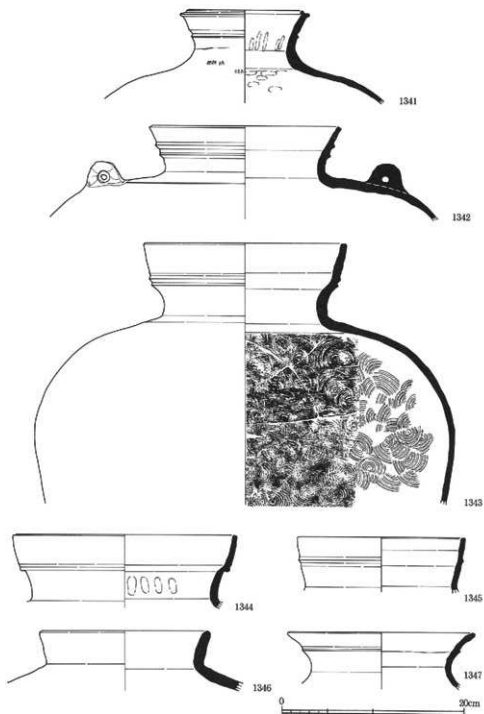
第183图 T G231号窟出土须惠器 8 (壶)



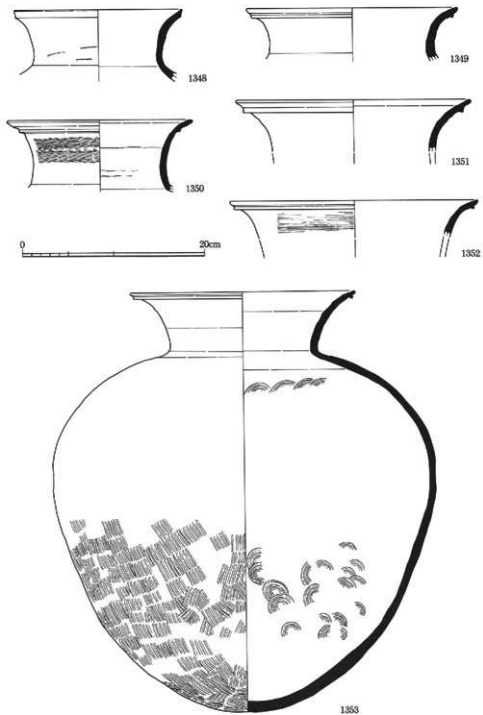
第184图 T G231号窟出土须惠器9 (壺)



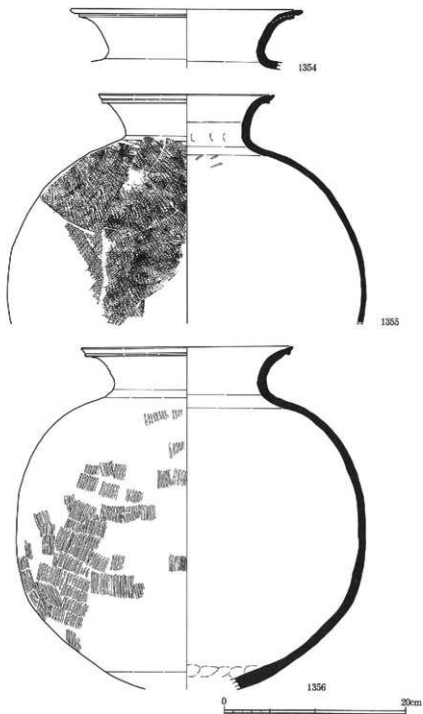
第185图 T G 231号窟出土须惠器10 (壶)



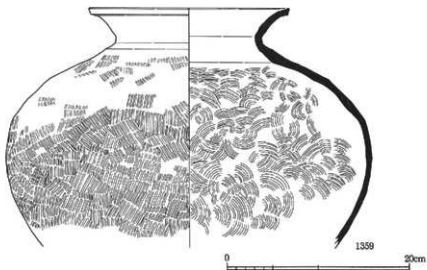
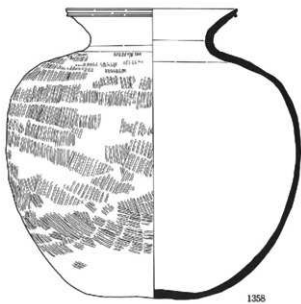
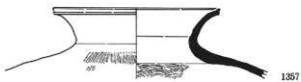
第186图 T G 231号窖出土须惠器11 (壶)



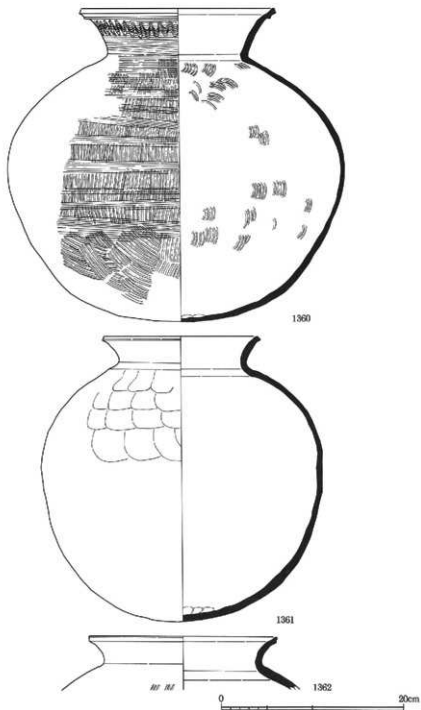
第187图 T G231号窟出土须惠器12 (壶)



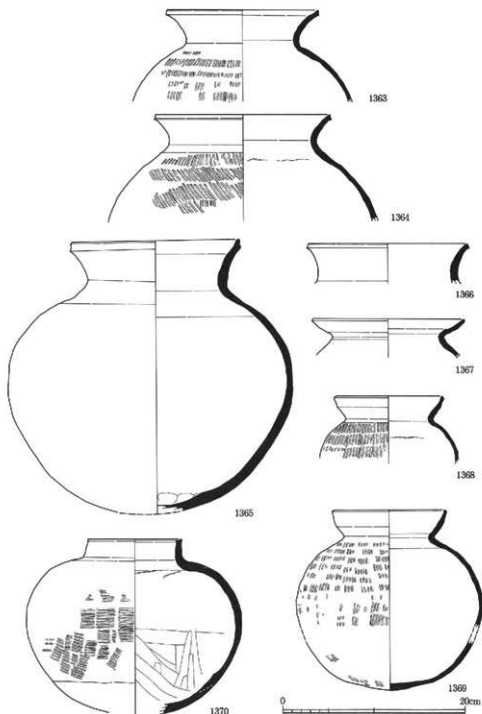
第188图 T G 231号窯出土須恵器13 (壺)



第189图 T G231号窯出土須恵器14 (壺)



第190图 T G231号窟出土须惠器15 (壺)



第191图 T G231号案出土须惠器16 (壶)

1354～1359・1361～1364は短く外反して開く口頸部をもつ短頸壺である。このうち1361～1365はT G 232号のK類に該当するが、1354～1359はK類に比べ口縁部の開きが大きい、底体部の肩の張りが大きいなどの特徴が看取される。K類とは若干の差異が認められ、別形態となる可能性もある。また1354は口縁端部の形状などからはI・J類に含まれるべきかもしれない。

1365・1366は緩やかに外反する口頸部のもので、T G 232号のM類に該当する。

1368・1369は土師器の甕を模倣した製品である。口縁部や底体部の形状など器形は土師器の甕と類似するが、底体部はタタキで調整されており、須恵器の技法により土師器の器形を模倣したことがうかがえる。また、1367も口縁部の開きが大きい、頸部には横方向のナデが観察され1368・1369同様土師器からの影響を推定できる。

1370は直口の短頸壺である。小型で丁寧なつくりである。

その他壺では、口頸部などの特徴から後出する時期のものと考えられる製品(1360)もあるが、灰原から出土しており、ここに図示している。

大型甕 (1371～1419)

T G 231号でも大型甕の出土数は他を圧倒している。ここではT G 232号の分類を基準に概観する。

T G 232号の分類では、第192図に示したように、口縁端部の形状によりA～E類に大別され、A・B類では凸帯の形状によってさらに細分される。

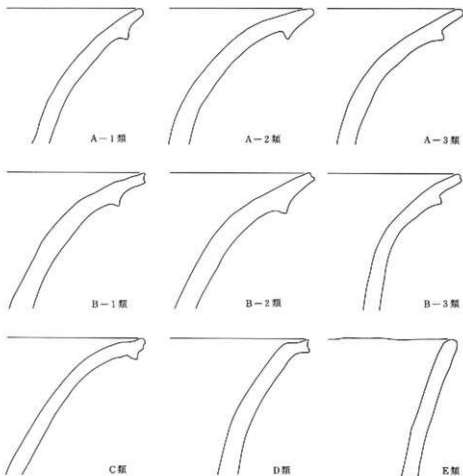
A類

口縁端部を丸く仕上げ、端部の直下に凸帯を巡らす形態で、凸帯の形状によりさらに3細分される。大型甕の中では最も出土数の多い形態である。

A-1類 (1371～1389)

丸く仕上げた口縁端部の下方1～2cmの位置に断面三角の凸帯を巡らすもので、A類の中で最も出土数の多い形態である。

大きさは口径35～56cmまでのものがあるが、40～50cm前後のものが多く、55cmを越えるものや40cm以下のものは少ない。口頸部の全体形状は直立気味にのび口縁部を大きく外反させるもの、やや開き気味の頸部から口縁部を大きく外反させるもの、ラッパ状に開くものがあるが、前者は口径45cmを越えるもの、後者は45cm以下のやや小型の製品で多くみられた。また、口頸部高はある程度口径に比例し、50cmを越える大型のものは高く、45cm以下のものは低いことも看取された。



第192図 大型甕口縁分類模式図

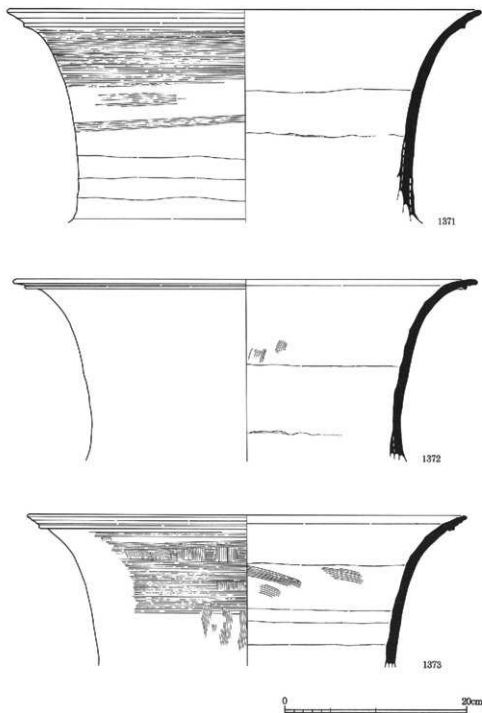
A-2 類 (1390~1397)

凸帯が上側は口縁端部から直線的につながり、下側は鋭角的に反り返るもので、A-1 類に比べると出土数は少ない。

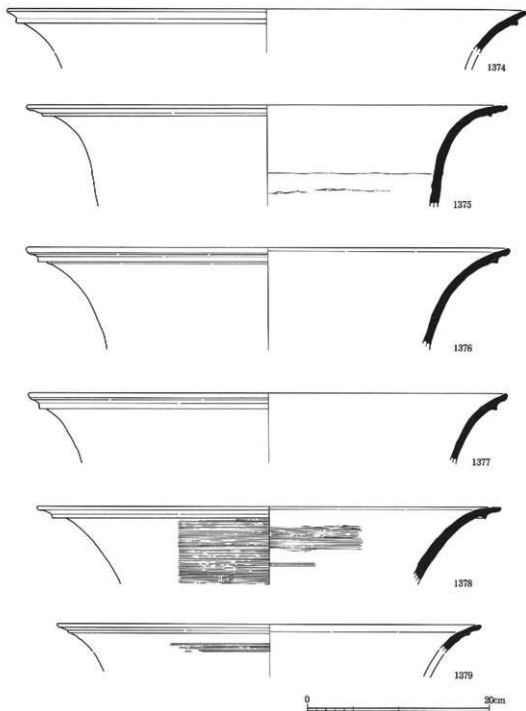
大きさはA-1 類同様ばらつきがみられるが、口径40~50cm前後のものが多く、40cm以下のものは極めて少ないようである。頸部の形状や口径と頸部高との関係など他の諸特徴はA-1 類と同様である。

A-3 類 (1398~1402)

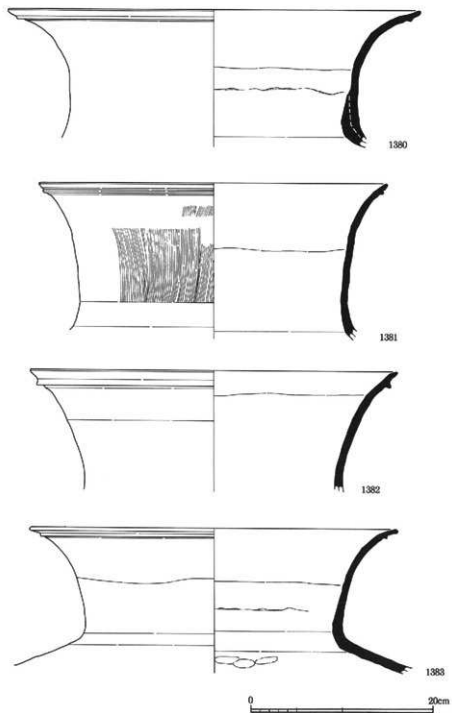
凸帯は上縁で明確な段をなし、下方が緩やかに弧を描いて頸部に移行するものである。なお、この形状の凸帯の中には、凸帯部位付近で胴口縁風に一旦丁寧にナデられ、さらに



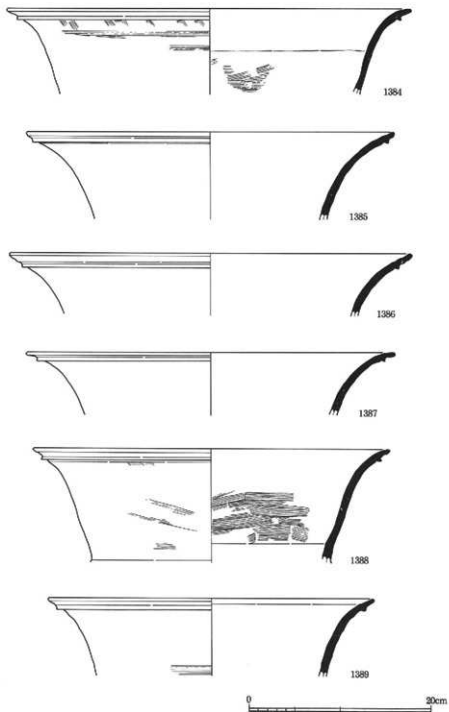
第193图 T G 231号窟出土须惠器17 (大型甕)



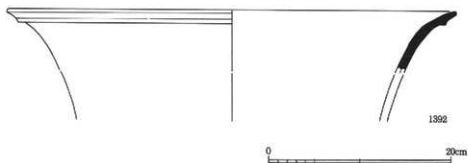
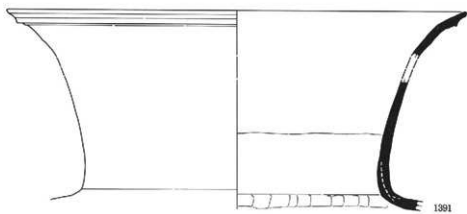
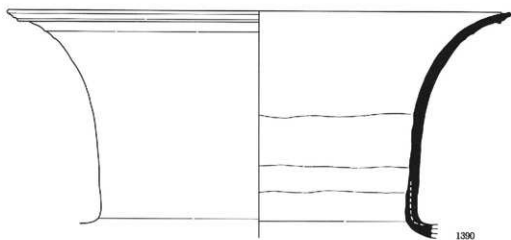
第194图 T.G.231号窟出土须惠器18 (大型甕)



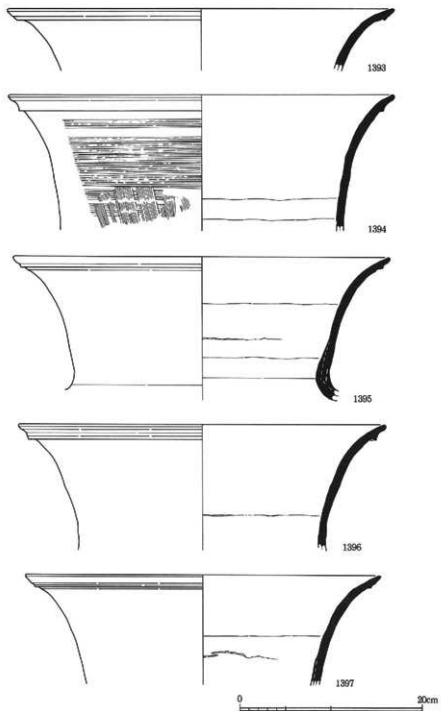
第195图 T G231号窟出土须惠器19 (大型甕)



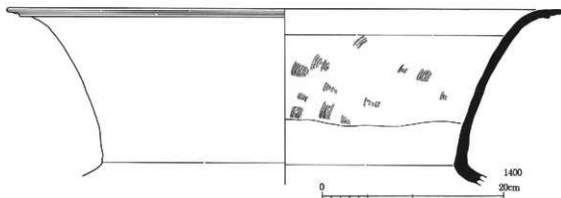
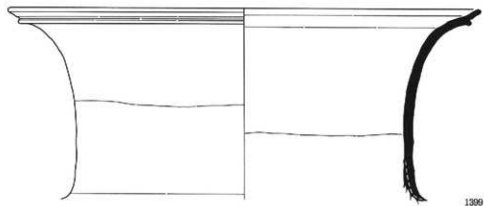
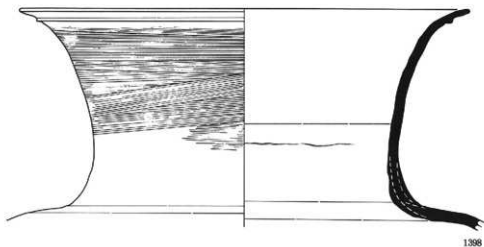
第196图 T G 231号窖出土须惠器20 (大型甕)



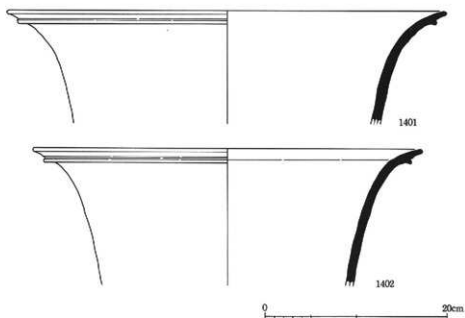
第197図 T G 231号窟出土須恵器21 (大型甕)



第198图 T G 231号窟出土须惠器22 (大型甕)



第199圖 T G 231号竈出土須惠器23 (大型甕)



第200図 T G 231号窯出土須恵器24 (大型甕)

その上方に粘土紐を継ぎ足すことにより口縁端部をつくりだしたのも多くみられる。A-1・2類とは異なった成形技法である。

大きさは、ほとんどが口径45cmを越える製品で、A-1類のような40cm以下の出土は極めて少ない。また、頸部高は口径に比例して高いものがほとんどであるが、当類では口径に対し頸部高の低いものもわずかながら存在している。

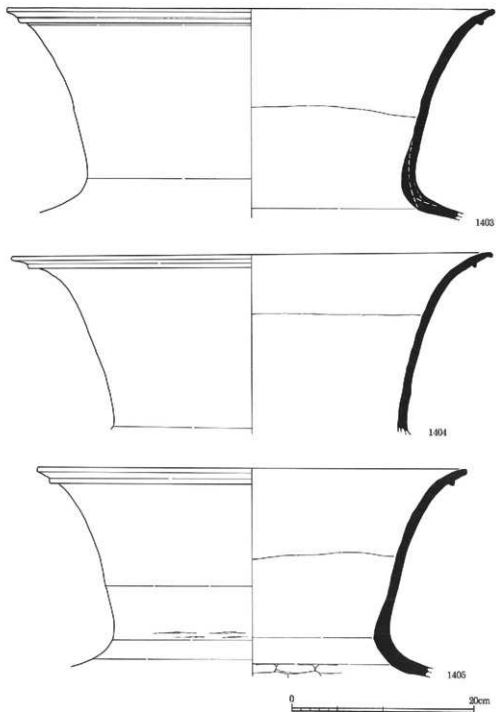
B類

口縁端部をナデにより面をもって仕上げ、端部の下方に凸帯を巡らす形態である。A類同様凸帯の形状により3細分される。出土数はA類に比べると極端に少ない。

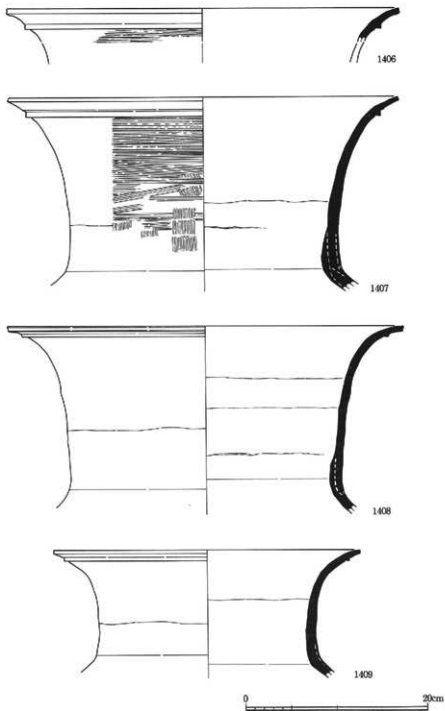
B-1類 (1403~1409)

凸帯の形状はA-1類と同一で、口縁端部の下方1~2cmの位置に断面三角形のものを巡らす。また、出土数もA-1類同様、B類の中では最も多い。

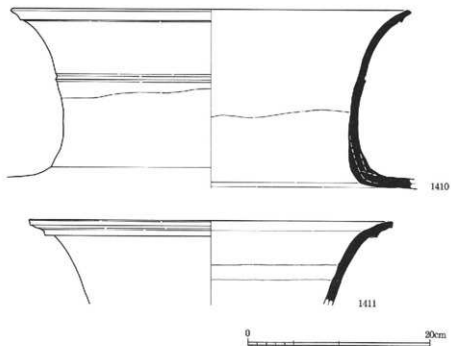
大きさは口径33~55cm前後のものまでであるが、40cm以下のものは極端に少ないようである。口縁部の形状は、直立する頸部から口縁部が大きく開くもの、開いてのびる頸部から口縁部がさらに大きく開くものがあるが、後者が多い。頸部高と口径の関係は45cmを越えるものはA類と同様であるが、B-1類では口径のやや小さいもの(42~43cm)でも、頸部高の高い一群(1407・1408)が存在する。



第201图 T G 231号窯出土須惠器25 (大型甕)



第202图 T G 231号窟出土须惠器26 (大型甕)



第203図 T G 231号窯出土須恵器27 (大型甕)

なお1403・1404はB-1類に含めたが、端部にはやや丸みをもちA-1類とは区別し難いものである。

B-2類 (1410・1411)

凸帯の形状がA-2類と同一のものである。出土数は少なく2点が図化されたが、1411はB-1類と区別し難いものである。また、1410は頸部中央に凸帯を巡らす特徴がある。この特徴を備えたものはT G 232号でも出土しているが、出土数は少ない。

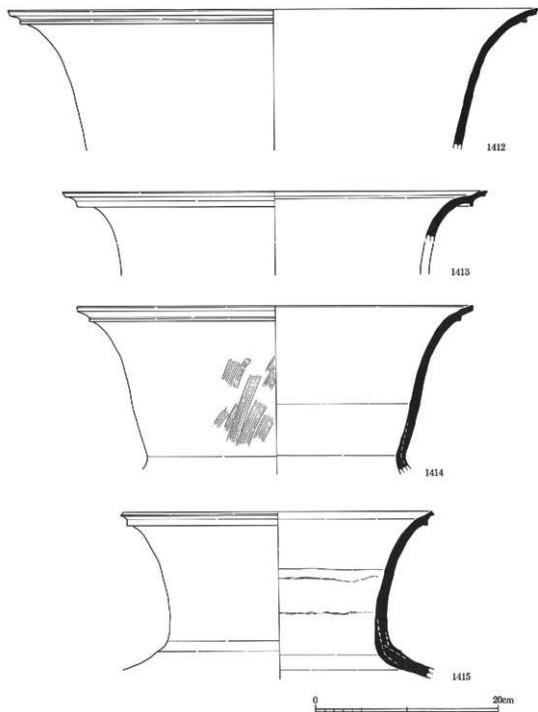
B-3類 (1412~1415)

凸帯の形状がA-3類と同一のものである。このうち1413では口縁部に段を有し、擬口縁風のつくり方が明確に観察される。また、1415はB-3類に含めたが、凸帯の形状はB-1類と判別し難いものである。

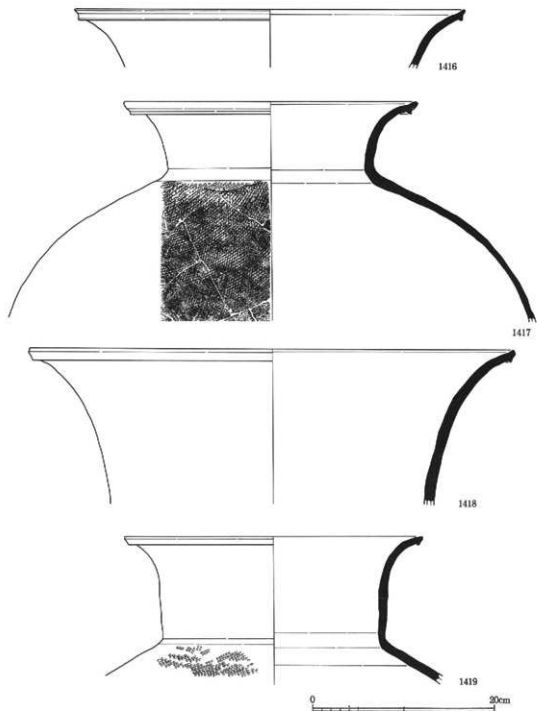
C類 (1416~1419)

口縁端部と凸帯とが明確に分離されていないもので、甕で顕著にみられる形態である。A・B類に比べ出土数は少なく4点を図示した。

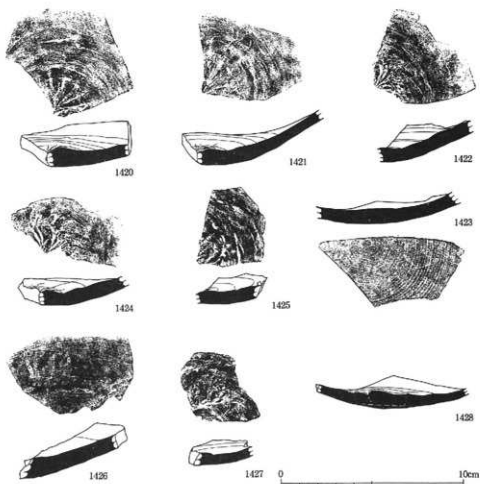
なお、1417・1419は口径から大型甕に含めたが、口径は30cmを若干上回る程度で、口頸部の全体形状は壺I類と類似している。



第204图 T G 231号窟出土须惠器28 (大型甕)



第205图 T G 231号窟出土须惠器29 (大型甕)



第206図 T G 231号窯出土須恵器30 (大型甕底部)

D・E類

D類は凸帯のないもの、E類は直口壺に似るもので、T G 231号では出土していない。

その他、大型甕におけるT G 232号との比較では調整や成形技法も注目される。T G 232号では頸部や体部にハケやカキ目を施すものが数多く出土しているが、T G 231号でも同様のものが数多くあり、調整に共通した特徴が認められた。さらに、後述するが成形の特徴でも両窯には底部に絞り目のあるものが認められた。

T G 231号とT G 232号ではD・E類の有無など多少の差異は存在する。しかし、両窯の大型甕は器形、調整、成形技法などの特徴はほぼ共通し、両窯の製品を識別することも難しい。他の器種に比べ全体様相は酷似する器種であることがうかがえる。

壺・大型甕底部（1420～1428）

底体部片の中から確実に底部として識別することは難しい。しかし、その中でも絞り目の残存したものは容易に底部として識別され、ここに9点を図示した。

この絞り目を残存させる底部は陶質土器との接点を示す特徴であり、TG232号でも出土している。ただ、TG231号ではTG232号にみられた底部が尖り気味になるものは確認されていない。若干の差異とも考えられるが、TG231号では出土数が少なく、さらにその多くが小片のため明確にはできない。

3. 軟質系土器（第207～209図、図版103）

TG231号でも数は少ないが軟質系土器も出土しており、軟質系土器が窖窯で焼成されたことが確認された。

また、出土した軟質系土器には、平底鉢、長胴甕、深鉢、壺、甗があり、他遺跡に比べ豊富な器種構成も当遺跡における特徴のひとつとなっている。

平底鉢（1429～1441）

谷部1の小開折谷（393-O L）などで出土したものをみると、平底鉢の口径には10cmから21cmまでのものがある。大まかには小・中・大型品に分けられ、最も出土数の多いものは13～15cm前後の中型品であった。

TG231号でも同様の傾向が看取され、口径15cm前後の中型品の出土が最も顕著であった。ただ、谷部1（393-O L）では口径10cm前後の小型品が中型品に次いで多くみられたが、TG231号ではこの小型品はほとんどみられなかった。

体部は、膨らみの小さいものとやや大きいものがあるが、いずれも膨らみ（最大径）が上半部に位置することが特徴である。口縁部は端部に面をもつもの（1429・1430・1432～1433）と丸く仕上げるもの（1431・1435）がある。出土数は前者が圧倒的に多い。

底部も数点を図示した。底径の小さいもの（1436・1430）と大きいもの（1437・1438・1440）があるが、前者は中型品、後者は大型品と推定される。なお、1441は底部端の稜が曖昧で他とは異なった形状を呈する。ここでは平底鉢としたが、他器種の可能性もある。

焼成は還元焰焼成により土師質に仕上がったものが多いが、酸化焰焼成により須恵質に仕上がったものも若干出土している。後者は意図的ではなく偶発的に須恵質に仕上がったと推定される。

長胴壺 (1442・1443)

小破片が多く図化されたものは2点(1442・1443)のみであった。いずれも口縁部から胴部肩付近までの残存であるが、胴部の膨らみは比較的小さいと推定される。また、胴部には螺旋状に巡ると考えられる沈線が刻まれる。螺旋状沈線は、古い段階にのみ採用された特徴で、大庭寺遺跡の中では谷部1の小開折谷(393-O L)に出土例がある。

深鉢 (1444・1445)

壺に比べ、体部の深いものである。法量差はあるが、器形は体部上半は直立気味にのび、口縁部は「く」の字状に短く外反させる共通した特徴がある。調整も同一で外面にはタタキ目をそのまま残存させている。把手の有無は不明であるが、付かない可能性の方が高い。出土例は少ない器種であるが、谷部1の小開折谷(393-O L)に類例がある。

塀 (1446・1447・1449)

浅い鉢状を呈するもの(1446・1447)と体部が大きく内湾するもの(1449)の2者がある。

後者は把手の付く一般的な形状のもので、外面は丁寧なナデによって仕上げられ、把手付近には沈線を巡らす。

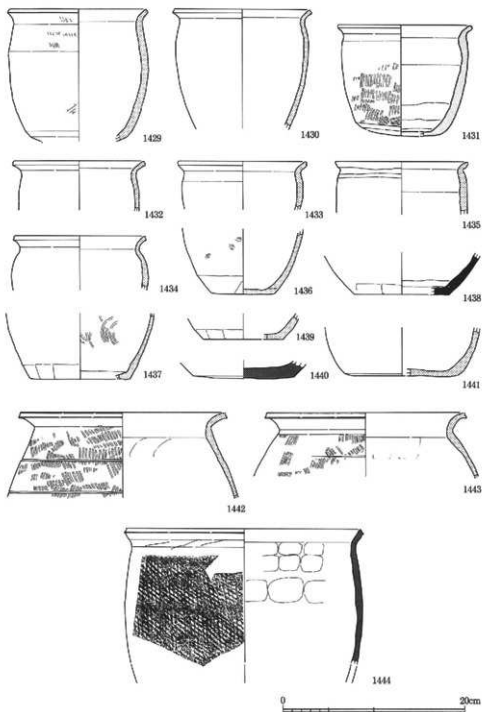
一方、前者は口縁部の形態、調整や胎土の特徴は上記の深鉢と酷似し、破片資料のため明確ではないが、把手がつかない可能性が高い。393-O Lでも鉢状の底体部のものは出土しているが、器壁や口縁部などは異なっている。ここでは塀としたが、塀ではなく鉢とすべきかもしれない。

甔 (1450~1454)

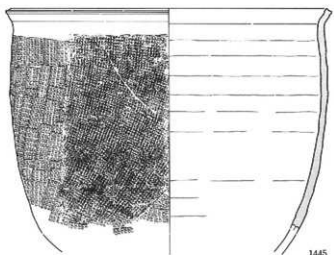
完形に復元されるものは出土していない。1450~1452は口縁部付近の破片である。口縁部の形状は類似するが、体部は直立気味にのびるもの(1451・1452)と開き気味にのびるもの(1450)がある。1453・1454は底部片である。1454の蒸気孔は小円孔を数列に巡らす形態で出土例は多い。1453は円孔と細長い楕円状のものを組み合わせる形態で出土例は少ない。

把手 (1455~1459)

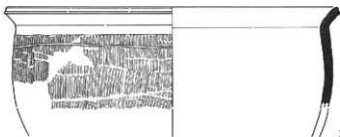
甔や塀の把手である。把手は先端部に丸みをもつもの(1455・1456)と先端部を平滑に仕上げるもの(1457~1456)がある。体部との接合は、把手の基部を器壁に差込み周辺に粘土を継ぎ足して補強する方法で、最終的に継ぎ足した粘土周辺は内外面ともナデにより滑らかに仕上げている。



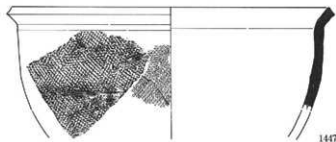
第207图 T G 231号窟出土软质土器 1



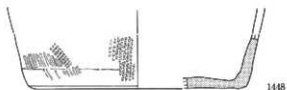
1445



1446



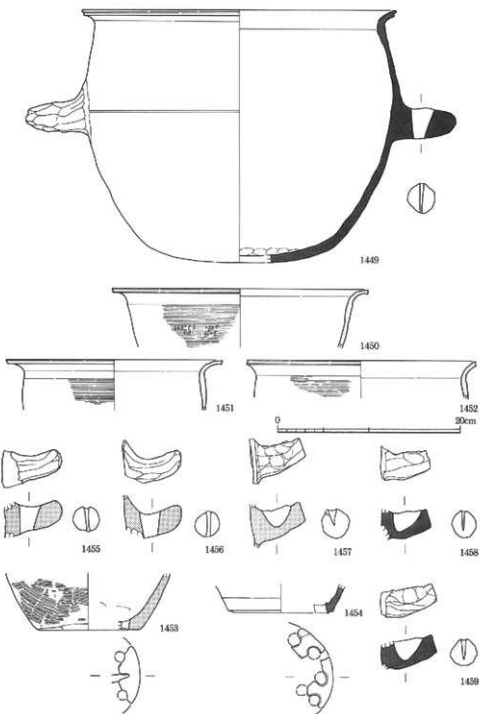
1447



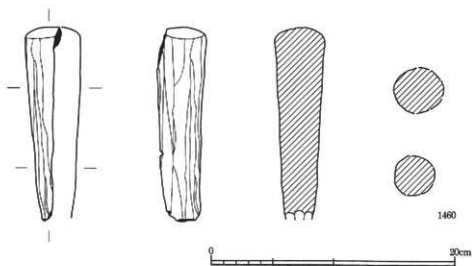
1448



第208图 T G 231号窑出土软质系土器 2



第209圖 T G 231号窟出土軟質系土器 3



第210図 T G 231号窯出土アテ具

4. その他 (第210図)

T G 231号の灰原からは須恵器や軟質系土器の他、窯道具である焼き台、須恵器製作道具であるアテ具も出土している。

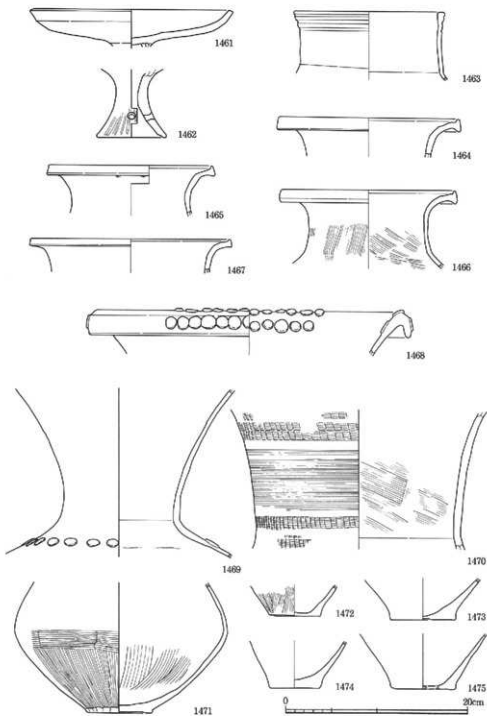
アテ具 (1460)

棒状のアテ具である。図示した上端部が平滑に仕上げられており、身と考えられる。握り部は身から徐々に細くなり、わずかながら反る。調整は粗いナデである。欠損するため法量値は不明であるが、全長は現存16esからわずかに大きくなる程度と推定される。

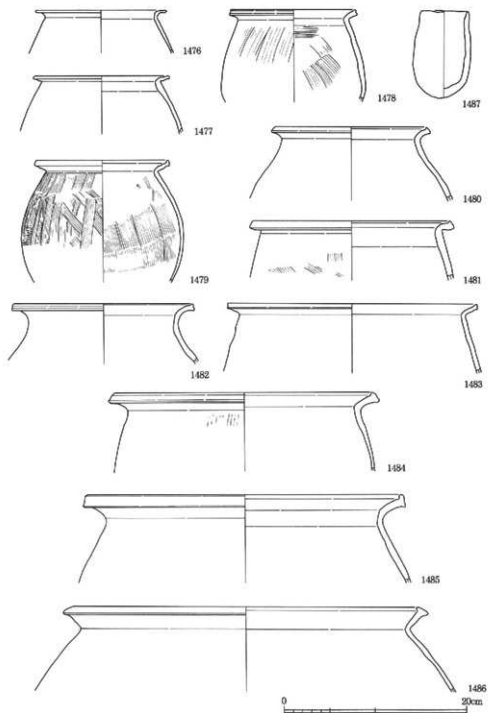
茸状のアテ具は大庭寺遺跡でも数点出土しているが、棒状のものは1460のみである。須恵器の器種や使用する箇所に合わせて、色々な大きさや形状のものが使用されたことがうかがえよう。

焼き台

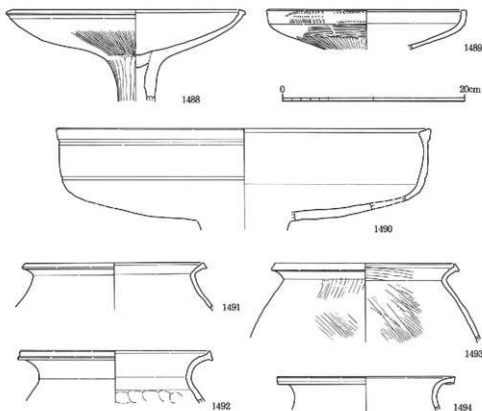
T G 231号では大型甕の体部片を数枚重ねて焼き台として転用したものが、数多く出土している。しかし、T G 232号で出土している支脚状や円環状を呈するものなど、焼き台として製作されたものは出土していない。



第211圖 T G 231号窟下層出土遺物 1



第212图 T G 231号窟下層出土遺物 2



第213図 T G 231号窯下層出土遺物 3

第 5 項 灰原下層の調査 (第175・211～213図, 図版103)

前述もしたが、灰原の下層では灰原形成以前の堆積層の存在も確認された。灰原形成前の堆積層と灰原層の関係については第175図に示している。

第21～23層は丘陵2の斜面の堆積層で、T G 231号灰原周辺から舌状の短い張り出し部付近までの広がり確認された。堆積の時期は出土遺物 (1461～1494) からみて弥生時代中期後半とされる。現在は残存していないが、当層における遺物の出土量から判断して、丘陵2上には小規模ながら当該期の集落が営まれたことが確実視される。

第15～19層は丘陵斜面の下端付近から谷底部にかけて広がる黒褐色の粘質土である。灰原形成時の旧表土に該当し、谷部2の基本層序第II a層 (第164図) に対応する。灰原周辺では遺物の出土はみられなかったが、T G 232号灰原の直下や谷底付近で古墳時代前期の土師器が出土した。これらは灰原と旧表土の関係から須恵器開始時期を考える上での基準資料となっている。

第4節 小結

谷部2（第Ⅲ～Ⅳ調査区）で得られた成果は、大きくは弥生時代～古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期の3時期に分けられる。ここでは各時代毎にまとめておく。

第1項 弥生時代～古墳時代前期の集落

谷部2の調査では当該期の明確な遺構は検出されなかったが、遺物は比較的まとまって出土している。

弥生時代では、丘陵2の斜面で中期末の良好な遺物包含層が確認された。これまでの大庭寺遺跡の調査では当該期（中期末）の遺物・遺構はほとんど検出されていなかったが、この包含層の確認によって丘陵2上に当該期の集落が営まれたことが確認された。ただ、丘陵規模から判断して小規模な集落であったと推定される。

中期以降では、谷底から後期後半の遺物を出土する自然流路が検出され、当該期の集落の存在も明らかとなった。中期集落との関連については、後期前半の遺物が流路内からも数点出土しており、連続して営まれた可能性は高いとされる。ただ、同丘陵（丘陵2）上に展開したとは考えられず、谷周辺の丘陵上や河川（56-O R）周辺の微高地上に小規模単位で展開したものと推定されよう。

また、大庭寺遺跡の立地する泉北丘陵における遺跡の動向を概観すると、中期後半から末には丘陵上に遺跡が展開することがうかがえる。代表的な遺跡では高蔵地区の伏尾遺跡や大野池地区の野々西遺跡などがある。しかし、このうち比較的規模の大きい伏尾遺跡（中期末～後期）でも当該期の拠点的な集落とするには小規模である。

泉北丘陵で規模に多少の差はあるものの、他を隔絶した規模を有する拠点的な集落の展開はみられず、比較的小規模の集落が有機的な関係を保ちながら、各地に点在していたものと推定される。これは、石津川下流域の肥沃な平野部に比べ、泉北丘陵の地形的な要因により生活基盤が限られていたためと考えられる。

古墳時代前期に至っても前代と大きな変化はない。大庭寺遺跡も同様で、住居や井戸などの遺構は検出されたが、前代より飛躍的に展開することはない。ただ、大庭寺遺跡の場合、その後の須恵器生産開始時の集落の展開を考える上では重要視される。

須恵器生産開始時の大庭寺遺跡では集落構造・規模、その後の発展性が前代とは比べものにならないほどに卓越しており、そこには計画的な集落展開がうかがえた。突如、前代

の伝統的な集落とは系譜を異にする須恵器生産集落が出現したのである。

しかし、前代の状況を概観すれば、この地には小規模ながら集落開発は行われていたことがうかがえる。つまり、新たな技術集団の集落の出現には、開発が皆無の未開地よりは、前代にもある程度開発された場所が選ばれた可能性もあり、大庭寺遺跡における古墳時代前期集落も出現要因のひとつとして考慮する必要もあろう。

第2項 初期須恵器窯（古墳時代中期）

窯本体は削平されていたが、わが国最古とされる初期須恵器を出土する灰原を2箇所検出した。TG231号窯とTG232号窯である。ここでは前述もしたが、近接する両窯を多視点で比較し諸問題を再度検討する。

1 須恵器の時期

TG231・232号窯は両窯とも形態・技法に陶質土器の特徴を色濃く反映させた一群がみられることが大きな特徴である。これらの特徴からいずれも最古型式（TG232号型式）に位置づけられることは確実であるが、前述したように形態や器種構成には差異も認められ、時間差の存在も指摘されている。

ただ、両窯でみられる差異は限られたものであり、さらに同形態の遺物からはその変化をうかがうことはできない。時間差の存在は十分考えられるが、存在しても極めて短時間であろう。むしろ、同形態の須恵器の諸特徴から判断すれば、ある一定期間は同時操業していたことが推定される。

なお、いずれの製品が先行するかについては、諸説あるが明確にはできなかった。

2 器種構成

最古型式に位置づけられる両窯の須恵器であるが、器種構成では若干の差異が存在した。ここではまず器種構成の異なる部分と共通する特徴を列挙する。

①—TG232号における脚付有蓋鉢の欠落。

②—同器種でも主として生産した製品の器形が異なる。高杯が特に顕著で、TG232号では数多く出土した多窓透かし脚部を特徴とする有蓋高杯B類が、TG231号ではほとんど出土していない。

③—②とは逆に、どちらの窯に伴うものか判断できないほど、形態の特徴が類似したも

のが数多く存在する。

④—両窯とも、最も多く生産された器種は大型甕で、次いで壺の順となる。

①・②は両窯での差異、③・④は共通点である。

このうち、①・②（差異）についてみると、いずれも陶質土器に類似する器種・器形のもので顕著であることが看取される。一方、共通点のうち、③の様相をみると壺や大型甕など陶質土器の影響を色濃く反映させた器種に認められる他、高杯や小型壺などでは土師器の特徴を有する器形（無蓋高杯A類、無蓋高杯P類、小型壺D類）で顕著に認められる傾向が看取された。

このように①～③の状況から両窯で生産された須恵器を概観すると、陶質土器そのものの形を反映させた器種では器形の個性が強く、土師器的な影響を受けたものは両窯である程度の類似性をうかがうことができる。

では、両窯のこのような特徴は何に起因するのであろうか。

前にも述べたが両窯は同時操業していた期間の存在が指摘される。これらの特徴は時期差を反映したものでなく、むしろ、これらを生産（製作）した工人が大きく影響しているものと考えられる。

つまり、陶質土器的な器形のもの、渡来系工人によって製作された可能性が強いものであり、両窯における①・②の差異は渡来工人の出自が反映されたものと理解されよう。一方、③の共通点からは、陶質土器的なものとは別に、倭的（土師器）様相の加わった製品、も積極的に製作したことがうかがえる。短絡的に倭工人が須恵器生産開始当初から大きく参与していたとすることはできないが、TG232号でみられた土師器の製作技法での接点なども参考にすれば、大庭寺遺跡（TG231・232号窯）ではその可能性は極めて高いとされよう。

さらに、④—大型甕を最も多く生産した事実からは、須恵器生産開始時における最も重要視され必要とされた器種は、それまでのわが国には存在しない、保水性のある大型の貯蔵器であったことがうかがえた。

この大型甕が須恵器生産開始まもないころに主として生産されたことは、これまでの初期須恵器窯の調査報告において言及された。しかし、TG231・232号よりは後出する初期須恵器窯であるTK73号窯、ON231号窯の主となる容量の製品と比較すると、TG231・232号ではこれら後出窯の製品より、一回り容量の大きいものが主として生産されていた。

さらに同容量でも、口径・器高ともに後出期のものに比べ大きく上回る製品が多い傾向もみられた。TG231・232号がより優れた技術によって製作されたことがうかがえよう。ただ、TG232号灰原の状況から明らかなように、優れた技術をもってしても大型製品のためか失敗製品もかなりの割合で生じている。

須恵器生産開始時には、大型甕が重要視されたことは間違いない。しかし、大型製品ゆえに焼き歪みも多く生じたであろう。須恵器の大量生産化の過程では、焼き歪み対策の一つとして、容量の小型化や口頸部の部分的な簡略化などが行われたとも理解される。また、後出時期には前段階に比べ倭工人も積極的に須恵器生産に参加したものと推定される。倭工人は技術的に渡来工人に比べ若干は劣っていたとも考えられ、効率的な大量生産化とともに倭工人の参与も簡略化へ進む一要因であったと推定される。

さらに、TG232号より後出のTK73型式では大型甕だけでなく、器台や高杯についても簡略化、器種（器形）の統一化などが顕著となる。部分的にはTG232号型式でも列島化がみられるが、本格的な須恵器の列島化はTK73型式とすることができよう。

3 灰原

前述したようにTG231号とTG232号は、出土須恵器の形態から判断して一時期同時操業していたことは確実視される。しかし両窯では灰原規模に大きな差がみられ、遺物の出土状況も大きく異なっていた。

特に、TG232号における大型甕の出土量、大型破片の存在、わずかながら両窯で接合関係のあるものが存在することなどを根拠として、TG232号の灰原は単独の灰原ではなくTG231号の灰原の一部、特に大型製品の廃棄場として共用していたのではないかとする考えもある。

一方、器種構成の差異、両窯特有の形態の製品の存在、接合資料が少ないなどの点から前述の意見には否定的で、窯規模の差が灰原規模に反映されたとする考えもある。

西日本各地に分布する初期須恵器窯である吹田32号窯・三郎池西岸窯・奥ヶ谷窯などを概観すると、いずれも陶邑の代表的な初期須恵器窯であるTK73号窯に比べるとその規模は極めて小型であったことが知られている。さらに、これら窯から出土する遺物には陶質土器の特徴を色濃く反映させた製品がみられ、TK73号窯に先行するTG232号型式に位置づけられることも確実である。これらの例からわが国に須恵器生産開始時点での窯の形態に小規模窯という形態が存在したことは明らかであり、TG231号窯もこのような小

規模窯であったと推定される。そのため灰原規模もこれに比例して小規模なものとなったとする考えである。

さらに、T G232号はその灰原規模からは小型窯とは考え難く、T K73号程度の窯規模が推定される。このように灰原規模が窯規模を反映しているとするなら、大庭寺遺跡では大小の窯が存在したこととなる。

上記のように残された灰原からは色々な推定が可能であるが、いずれの考えにしても窯そのものが残存していないため、憶測の域をでるものではない。

大庭寺遺跡の場合、これらの議論より、窯経営が単体で行われたのではなく、複数の窯によって大規模に行われたことに注目すべきである。大庭寺遺跡では灰原から2基の窯の存在が明らかであるが、谷部1の小開析谷(393-OL)から出土した須恵器からは両窯に極めて近接した時期の窯の存在も確実視され、その後のT K73型式の時期に至っても連続して窯が存在したこともうかがえる。

この西日本各地の初期須恵器窯を大きく上回る生産規模やその後の発展性こそが大庭寺遺跡における特筆すべき点である。

このような大庭寺遺跡の様相から、「陶邑」の成立や発展過程の一端をうかがい知ることができ、「陶邑」がわが国における須恵器生産開始時から中央窯的な役割を担っていたと推定される。

第七章 分析

TG-232号窯出土の須恵器（小型器種）の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一, 今井加織, 大石知恵, 阿部雅浩

1) はじめに

昨年度、TG-231・232号窯出土の硬質土器を分析し、その胎土を伽耶群（内谷洞窯、余草里窯）と陶邑群のものと比較した。その結果、TG-231・232号窯の硬質土器は形式上は陶質土器と区別はつかないが、その胎土は陶邑産の須恵器と同質であることが判明した。つまり、陶邑内にある粘土を素材とした須恵器であったという訳である。さらに、昨年度分析した試料の器形は両窯とも甕であった。TG-231号窯の甕胎土とTG-232号窯の甕胎土は同じであり、同じところで採取した粘土を素材としたことも判明した。

今回は同じ窯跡から出土した須恵器でも、器形が異なれば、胎土も異なるのかどうかを確かめるため、TG-232号窯から出土した小型器種を分析し、昨年分析した甕類のデータと比較することにした。

2) 分析結果

試料処理法、分析法、データ解析は昨年と同じである。

今回分析した全試料の分析値は表1にまとめられている。全分析値は岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されている。

次に、データ解析の結果について説明する。はじめに、昨年度分析したTG-232号窯出土須恵器（甕類）のRb-Sr分布図を図

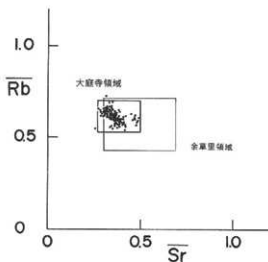


図1 TG-232号窯出土須恵器（甕類）のRb-Sr分布図